
閉じない世界に約束を

下降現状

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉じない世界に約束を

【Nコード】

N1903E

【作者名】

下降現状

【あらすじ】

なにとはなしに日々を過ごしていた高校生、七瀬兎月。学校をサボって発掘現場に出かけた彼が遭遇したのは、数奇な運命と巨大なロボットだった。

獅子の心・1

天に近づこうとするのは、最早人間の本能なのではないだろうか。アリシアはそんなことを思う。

故に人は翼を求め、天突く塔を建てる。空の上に在るのはただの真空だと知った今でも、変わらず。

最も新しき天突く塔——UNタワー最上階の一室では、タワー落成記念の立食パーティーが開かれている。広い部屋をシャンデリアの灯りが照らし、いくつも置かれたテーブルの上には白いテーブルクロスがかけられ、その上に多種多様な料理が並べられていた。

招待客たちは各人思い思いに語り、食事を摘んでいる。それを眺めながら、自身も招待客の一人であるアリシアは部屋の隅のほうでシャンペングラスを傾けていた。中年や壮年の招待客が殆どを占める中、美しく年若い女性であり、その上連れが居るわけでもないアリシアはひどく人の目を引いていた。

——どうにも落ち着かない。

金の長髪を流し、白いドレスを纏ったアリシアはそんなことを思いながら、甘いシャンペンで口を湿らす。視線の圧力——ばかりが理由ではなかった。

周りに居るのが日本人ばかりだからという理由では、無論ない。日本に住んでもう長い——と言うより、生まれてからずっと日本住まいで国籍も日本だ。心理的には生粋の日本人だと言っても良い——というのに、そんなことに気を煩わせているわけがない。

落ち着かない理由は、自らの服装だった。アリシアが目線を下にと、絨毯と擦れてしまいそうなほどの長さのドレスの裾が見えた。どうにも動きづらくて仕方がない。普段穿いているのは、殆どがジーンズなのだから当然といえば当然なのではあるが。

——それもこれも、出不精のあいつが悪いんだ。

また、グラスを傾ける。本来、ここに来るのはアリシアの筈ではなかった。招待されたのはアリシアの夫だったのであるが、本人が面倒だというので、代わりにアリシアがやってきたのだった。

アリシアとて、こういった場所に好き好んでくるようなタイプではない。元々はとある大学で考古学を学んでおり、発掘やら何やらで外を飛び回ることが多く、また本人もそういった活動を好んでいる。夫と出会ったのも、その発掘が縁である。

しかし、パーティーに参加しないというわけにもいかなかったのだ。

ここ、UNタワーは日本の常任理事国入りの記念と、それに伴う国連機能の一部移転のために建築されたものである。国際協調の流れから行われた国連の機能拡充の際に、経済大国である日本はその任を大きく負わされることになった。そのような出自ゆえに、詩的に現世のバベルなどと、ここを呼ぶものもある。

——まあ、日本からしてみたらただでさえ赤字でひーひー言っているところに、へんなもん押し付けられたってのが本当のところなんだろうけど。

そんなことを思いながら、またもアリシアはグラスを傾ける。甘みと僅かなアルコールが、喉を洗った。

常任理事国入り決議から一年経って、今より三年前に建築が開始されたこのUNタワーは建築中のトラブルなどもあって、つい最近になってやっと建築が終わった。

ある意味では国連の新体制を象徴する施設であり、その落成記念パーティーもまた重要なイベントである。大した理由もなく欠席するわけにもいかなかったのである。

だが、とアリシアはまた思う。

——素直にあいつと一緒に病欠しておけばよかったかもしれない。そう出来ないことが自分の美德であり、欠点でもあると自覚し、それが『自分』であると分かつてはいるのだが、ついそんなことを

考えてしまう。『あいつ』と自分は違っけれども、あいつのように生きてみたいと、『あいつ』の傍にすることが常となった後でも思ってしまう。『あいつ』のように、限りなく自由に。

そんなことを考えていたとき、ふ、と視界がまるで目隠しされたかのように、瞬間的に闇に包まれるのを感じた。よろめきながらも、すぐにもち直す。立ち眩みとは、慣れない場所で疲れていたのだろうか？ そう思って手を頭にやる。その手が小刻みに痙攣していた。体調を崩したのかと思ったが、周りの人間も何か同様に体調の不良を訴えているようだ。中には床に倒れこんでいるものもある。倒れている人に駆け寄ろうと、一歩足を踏み出そうとして、アリシアは大きくバランスを崩した。

手をつくこともできずに、アリシアは絨毯の上に転がる。

「う……」

どうやら、思った以上に自分も調子がおかしいようだ。しかし、こうも大勢の人が一度にとは、もしかや食事に何か混ぜられていたのだろうか？

手を伸ばして立ち上がるうとするも、体が思うように動かない。

そうこうするうちに、痙攣がひどくなっていることに気づく。身体がどこもかしこも、まるで河豚毒でも食らったかのように、小刻みに震えている。

——呼吸を……。

息だ。息を吸って、体勢を立て直すのだ。

息を吸い込もうとしたが、それも出来なかった。肺が震えるばかりで、一向に膨らまない。

——どう、して。

そのまま、だんだんと意識が遠のいていく。認識する世界がどんどんと白く狭く変質していく。

『わたし』が何かに途轍もない大きさの怪物に飲み込まれていく。
「いや……」

続く言葉は、声帯を震わすことも出来なかった。

——助けて……ぎ——

涙が白い頬をつたい、絨毯の上に落ちた。それでアリシア「Y」
森川の生は終わった。

：
——：
：

建築の段階から仕込まれていた化学兵器は、落成記念パーティーの最中に、有毒ガスとなってU.Nタワー内に散布された。散布された化学兵器は、かつて日本とあるカルト団体が使ったものと同じ種類のものであった。

パーティーの参加者、以外にもタワー内部にいた人間はほぼ死亡した。死者は総計で二百人にも及び、この事件は九一一以来最悪のテロと呼ばれるようになった。

果たして、アリシアの死は必然だったのだろうか？ 何かがつでもずれていたら、彼女は死なずに済んだのではないだろうか？ 彼女が彼にならってパーティーを病欠していたならば、或いは彼がきちりとパーティーに出席していたら。

或いは——

或いは、そんなことはあり得なかったというのだろうか。

必然か、運命か。

単なる既定事項か。

かくして、バベルはやはり倒れた。

このテロが与えた影響は、日本から世界に大きく伝播していき、世界を大きく変えることになる。この事件を起こした左翼系活動組織が、末端の末端に至るまで逮捕、或いは殲滅されつくした後に至っても、である。

——それから十五年の月日が流れた。

眠い。頭の中にまるで靄がかかっているかのように全てがはつきりとせず、ありとあらゆるものが歪んで感ぜられる。春眠曉を覚えず——などと言うには、流石に遅い時節であるというのに。

そんなことを何とはなしに思いながら、七瀬^{ななせ} 兎月^{うつき}は、自らが通っている公立結ヶ原^{ゆいがはら}第一高校への道行を歩いていた。歩道には陽光が差し、隣の車道には車がひっきりなしに走る。両脇の民家からは、騒音と熱が朝の活気となって、慌しさを外に溢れさせている。眠気が覚めるかと思い頭をやたらに掻き毟つてみたが、茶色がかった癖っ毛が暴れるばかりで、ちっとも変わらない。

それというのもこれというのも、退屈が原因なのかもしれない。一般的に、高校二年というのはもっとも退屈している高校生だといえる。入学した／高校生になったという緊張感がある一年でも、大学受験を控えているという三年でもない。モラトリウムの中のモラトリウム、成すべき事があれば成すだけの時間があり、何もなければ退屈しているだけの時間。

そんな貴重な怠惰／ぬるま湯は、兎月には病にも似て感じられた。大きく欠伸をして、口に溜まった唾を吐いた。それを見ていた、これまた登校途中であろう小学生が、顔をこわばらせて逃げ出した。——逃げるようなことかよ。

少しばかりの空しさが胸中をよぎり、足を止めた。そんなとき、兎月に後ろから声がかけられた。声は僅かばかりに怒りが混じらせた、トーンの高いものだった。

「また子供を怖がらせて」

その声に向かって兎月は振り返る。その先に立っていたのは、背まで黒髪を垂らした、釣り目気味の少女だった。灰色のカチューシヤを髪につけた少女は、その白い細い指を兎月に向けた。

「もうちょつと愛想良くしろつて、いつも言ってるでしょう!」

「お前か……千歌。俺だつて好きでやってるわけじゃねえよ」

足を止めた兎月に向かって、少女——高槻たかつき千歌せんかは指を突きつけたままずんと歩み寄つてきた。そのまま隣について、千歌は兎月の額を人差し指でちょん、と突いた。

「言い訳するなっ」

「餓鬼の頃と変わらねー扱いしやがつて」

「あんたが子供のままだから、これでいーの」

言つと、千歌は歩き出した。その隣に並んで兎月も同じ早さで歩く。

兎月と千歌の関係は長い。高校二年の現在に於いて、既に十年をゆうに超えている。他人から見れば幼馴染なのだろうが、兎月からすれば腐れ縁と言ふ単語のほうがつくり来る。きっと、千歌も同じように思っているだろう。

「そう言えば、今日は遅かつたなお前」

何とはなしに、兎月はそう言う。

兎月の知る限りでは、基本的にいつも千歌のほうが多く家を出ている。道中で会えば一緒に学校に来るが、最近ではむしろ兎月が学校に着いた時には、もう千歌が先に着いているのが普通になっていた。

「んー、父さんが今日から遠出だからね。ちょつと出発準備の手伝いしてた」

「先生が遠出つてことは、発掘か？ 最近それらしい遺跡が見つかったなんて話は聞いてねえぞ」

千歌の父である高槻たかつき孝祐こうすけは考古学者であり、とある大学で教授をしており、もっぱらフィールドワークに精を出す行動派として有名である。

「……相変わらず食いつき良いね。それが、出てきたものが遺跡なんだかどうかはよく分からないから、まだ大幅に報道はされていないんだつて」

「どういうことだ？ 分かりやすく説明しろ」

勢いよく問う兎月に対して、千歌は首を捻り、眉間にしわを寄せながらも説明しだした。

「何か、最近長野の工事現場で地滑りがあつたらしいんだけど、そのときに山肌から何か人工物らしい物が出てきたんだって。もしも仮に遺跡とかで歴史的価値が結構有るものだとしたら、工事とかないでちゃんと保護しないといけないらしいから、そこらへんを調べるために、父さんが呼ばれたみたい」

私には良く分かんないんだけどね、と千歌は付け加えた。

「それで、見つかった人工物って言うのは何なんだ？」

「うーん、ぱつと見は岩石みたいな、でっかい動物の手なんだって」「なんだって？」

思わず、聞き返した。でかい動物の手？ 化石か何かだろうか。

「工事現場って山の中らしくて、そこから岩石みたいなもので出来た、猫か何かの前足が出てきてる——って、私は聞いた」

「余計に分からなくなったぞ……もう少し情報があれば何だか考えようもあるっつーのに」

兎月は首を捻る。

兎月は、どうにも幼い頃から古代文明やら何やらと言った話が好きだった。子供の頃から、千歌の父に色んな話を聞いていたのが切欠かもしれない。それは高校生になった今でも、変わらない。兎月の手狭な部屋の本棚には、教科書や漫画に混じって、ぼろぼろになった『たいこのひみつ』やら真新しい『図説ヒエログリフ』などが並んでいる。三つ子の魂百まで、というわけだろう。

「そう言えば、一体なんて山なんだ？ その手が出てきた山ってのは」

そう聞いた兎月に、脳内を搜索するように首を捻りながら千歌は答えた。

「確か……皆神山だったかな？」

その名を聞いて、兎月は考え込む。

「長野県の皆神山って、長野県長野市の皆神山だよな」

「そうそう、確かそうだった気がする」

ぽん、と両手を胸の前で敲きながら得心して千歌は答える。対して、それを聞いた兎月はやはりと頷いた。

「……まさか、自分で現場に行く気？ 駄目だからねちゃんと学校行かないと」

じと目になつて、千歌は兎月を睨む。

「わあつてるよ」

うんざりとしながら、兎月は答えた。何時もの事だ。

こんなことを千歌が兎月に対して言うのも、それを聞いて兎月が不機嫌になるのも、である。

何時も通り、兎月と千歌は学校への道に行く。

続いている間はその貴重さに気づかない、何時までも続くような気がする猶予期間を、二人は歩いていた。

：
—
：

まるで、書物で壁を作ったかのようなだった。

それなりの広さがあるものの、四方を本棚で埋め尽くされている薄暗い部屋は、奇妙な圧迫感を人に与える。そんな部屋の中央に備え付けられた机に、一人の男が書物を広げて向かっていた。

男は恐らくは三十から四十と言ったところなのだろうが、正確な年齢は他人に読み取らせない。何故なら、男はその顔の上半分を隠すように、白いマスクラをつけていたからだ。マスクラをつけた男はウェーブのかかった白髪を静かに垂らしながら、一冊の書物を捲っている。

書物は丁度厚めの辞典ほどのサイズであり、外観は方々から下地の白が覗いているような、古ぼけた赤い無地である。

男は中ほどにも達していないその本を、じっくりとまるで一文字一文字を味わってでもいるかのようにゆっくりと捲っている。しか

し味わっているのだとしたら、それは決して美味ではないのだろう。まるで苦味を噛み殺してでもいるかのように、彼の表情は歪んでいた。

そんな部屋の入り口が開かれて、外の光が差し込んできた。

「また、こんなところにおられたのですか」

透き通った、女性の声が部屋の中に反響する。仮面の男がそちらを振り向くと、そこには一人の女性が立っていた。黒いドレスを着て、大きく開いた背中まで艶やかな黒髪を流した女性は、切れ長の瞳をやや潤ませながら立っていた。

「周防か」

女性——周防に向かって一度目をやると、仮面の男はまた書物に目を落とした。

「貴方がここに呼んだというのに……冷たい人」

「そうだったな」

そう呟く仮面の男に、周防はゆっくりと歩んで傍による。そしてその白い指を男の手に沿わせる。黒一色の服と部屋の薄暗さに対比して、まるで天の川のように周防の指は白く映えていた。

しかし男はその指を取ること無く、書物を捲り続けながら口を開いた。

「刻が来た。我々が動く刻が」

そよ風に葉が揺れるかのような、そんな静かな声を聞いて周防は強風に揺れる大樹のように震えた。

「嗚呼、やつと、やつとですね。私達の戦いが始まる時が来るのですね」

頬を、まるで恋する少女おとめのように上気させながら、周防は言う。

「そうだ。我々の潜伏は終わり、我々の敵は目覚め、我々の戦いは始まるのだ。我々は地獄の歯車に絡む些細な塵に過ぎない、しかしそれで地獄の機械はほぞを破壊され止ってしまう。君はその尖兵だ。行きたまえ、そして存分にその威力ちからを振るいたまえ、四魔剣が一人・

周防 命すゝめ」

「了解致しました。我等が主、我等が魂、我等が修正者」
コレクター

仮面の男に跪いてそう言つと、周防は颯爽と部屋を去つていった。部屋にはまた静寂が戻つた。ぱらり。

その中に響くのは、仮面の男が書物の頁を捲る音だけだ。

書物がある頁に差し掛かると、男は手を止めて、代わりに口を開いた。

「全ては予定通りだ全くもって忌々しいことに」

その表情は、マスクラに隠されていない部分からでも十分に歪みを見せていた。

：
――：
：

少し汗をかいたけれども、それが心地良い。運動で熱を持った肌を、流れる汗が気化して冷ます。原始的だが、もつとも快適な冷房なのかもしれないと、千歌は思う。もつとも、それに頼つていて匂いが漂つてきたりするのとは女の子としては流石によろしくないもので、汗は拭いて、後に簡単な消臭はするのだが。

未だ僅かに額を流れる汗をタオルでふき取りながら、千歌は教室に足を踏み入れた。今朝は忙しかったために、朝食をしつかりとれなかった。その上に、先の授業で張り切りすぎて少しばかりいつもの昼より空腹だ。さつさと昼食をとつてしまおう。

そう思い、教室を見回して兎月の姿を探す。教室の中には先に授業が終わつたのであろう男子が数人居たが、その中に兎月の姿は無かった。

——どこで油売つてるのよ。

そんなことを考えながら、千歌は自分の席に着いた。弁当を目の前に広げて、そのまま待った。しかし、五分ほど経つて皆が戻つてきても兎月は戻つてこない。いい加減に焦れてくる。何せ空腹なのだ。

「せんちゃんどしたのー？ ご飯広げて、手もつけないで」

そう、背後から千歌に声かけられる。千歌が振り返ると、そこには友人の三上^{みかみ} 陽菜^{ひな}が笑顔で立っていた。何時も笑っていると言われるほどの彼女は、ショートカットを揺らして、椅子に腰掛けた千歌を覗き込みながら、続ける。

「わたしが食べちゃってもいいってこと？ その卵焼きとかさいこーに好物なんだけどなあー」

そう言つて、陽菜は千歌の弁当箱の中身を指差した。その先には千歌の好みに合わせた、少し砂糖が大目の卵焼きがあつた。

「いいよ」

空腹であつたが、友人の可愛らしい頼みに答えられないほどに気は立っていなかった。

「おつ、せんちゃん太っ腹ー。はい、あーん」

口を開けて、机の横に陽菜は移動する。

「金魚じゃないんだから……はい」

そんな陽菜に、呆れながらも千歌は卵焼きの一つを箸で摘んで陽菜の口元に運んだ。間髪入れずに、陽菜はそれをぱくりと小鳥のように啄ばむと、もごもごと口を動かしてから、大きく喉を鳴らして飲み込んだ。

「行儀、悪いよ」

顔を顰めながらそう指摘する千歌に、頭を掻きながら陽菜は答えた。

「いやー、立つて、あーんってしてる人間に今更そんなこと言われてもねー」

「そう言われると、そうかも。じゃあ、次からはあげない事にするから」

「あー、せんちゃんご無体」

そう言いながら、陽菜は、きゅー、と疲労困憊したかのように千歌の机に倒れこんだ。オーバーリアクション気味なのも何時もの事なので、千歌は軽く流すことにした。

流して、そのまま千歌は陽菜に問う。

「そう言えば、兎月見なかった？　なんか授業終わってから見てないんだけど」

こっちは待っているというのに。

それを聞いて、陽菜は倒れこんでいた体をまるでバネ仕掛けのおもちやのように勢いよく立ち上がらせながら、両手をぽんと叩いた。
「あー、せんちゃん、うーくんを待ってたんだ。らぶいね」

「いや、そんなんじゃないって」

半ばうんざりとしながら、千歌は答える。そう見られることは結構多いし、仕方ないとも思っているのだけれども、どうにも釈然としない。本当にそういう関係に見えるのだろうか？　自分と兎月は小さい頃はめめそと泣いてばかりいた兎月の印象ばかりが強く、そんな兎月とじぶんがそういう関係になっているところなど、どうも想像すらつかない。今となっては、兎月も自分もあの頃とは違うのだということを頭では理解していても、自分よりも背が低くいつも泣いていた兎月と今の兎月が重なって見えて仕方が無い。

あの頃は、あの人が飴で自分が鞭として兎月に接していた。

そんな千歌に対して、額に手をやりながら陽菜は言う。

「うーん、そう言えば見てないね。どうしたんだろ？」

そして、陽菜は近くに居た男子生徒に声をかけた。

「やや、けーくんや」

「おう、どーした三の字」

返答したのは、購買部から買ってきたサンドイッチを両手に抱えた福山圭一ふくやま けいいちだった。彼が抱えたサンドイッチは、普通一人で食べるには多い量だが、彼には妥当な量であるらしい。

「うーくんが何処に行ったか知らないかい？」

「うーって誰だっけ？」

そう、圭一は千歌に問う。陽菜による他人の呼称は、ワンパターンかつ被っても気にしないので、時折彼女以外には誰のことか分からなくなる。

「兎月のこと」

「あー、兎月か。なんか用事があるからって俺に誤魔化し頼んで体育の前にどっか出かけちゃったぜ」

なんかあったのかね、と言いながら圭一はサンドイッチに食いついた。

——あの馬鹿。

思わず、千歌は右手を握り締めていた。作られた拳が、まるでそこだけ地震が起こっているかのように勝手に震えていた。

止めたのに、あいつは行ったのだ。父が居る現場まで。

「えーと、せんちゃん？」

「どうした、高槻？」

二人が何か言っているが、耳に入ってこない。頭に血が上っているのだろつということは理解できるが、理解できたところで衝動は止まらない。

膝が勝手に千歌を立ち上がらせる。

「あの——ばつかあああああああ——」

千歌の喉が震えて教室中に声を響き渡らせる。陽菜と恵一を含む、昼食を取っていた全員の視線が一点／千歌に集中した。当然のことであるが、全員が全員、目を皿のように丸くしていた。

「え、あ、その……ごめん……」

周囲を見回すと、今更ながら叫びを上げた自分が恥ずかしくなった。きつと今も顔は真っ赤になっているだろうが、その理由は先とは違っただろう。

急いで座って、顔を俯かせる。

それというのもこれというのも、全部兎月が悪いのだ。自分はただ少しばかり兎月のことが心配なだけなのに。

「馬鹿……」

俯いたまま、千歌は誰にも聞かれないように呟いた。

獅子の心・2

：――：

駅で買った地図を広げて、兎月は電車の座席に一人腰掛ける。学校を自主的に早退――一般的にはサボリと呼ばれる――しての旅は、優雅かつ快適なものだ。学校からそのまま来たので、制服のままなのは少しばかり問題があるが、些細なことだ。

飛ぶように――というには少しばかり遅く流れる景色を横目に、兎月は地図の一点に目を移した。

皆神山。

標高六七九メートルの、上部がひしゃげた、ドーム型をした山である。

知らぬ者にとっては日本各地に存在する山の内の一つでしかないが、知るものにとってはちょっとした意味を持つ名前である。与太話だというのは承知の上で、それでも兎月は気になくはない。なかつた。

酒井 さかい 勝軍 かつとき という男が居た。日本人とユダヤ人が同一のルーツを持つという日ユ同祖論を述べたり、かの有名な偽書・竹内文書を見つけて一般に紹介したりした、戦前のお駆るティストである。

彼の様々な胡散臭い功績の中の一つに、日本のピラミッドの『発見』がある。

日本のピラミッドとは、日本に存在する山の中には、完全な自然物ではなく自然の地形を利用しつつ其処に半人工的に石や土を積み上げて作られたものである。後に数千年の時間をかけることによって、自然の山と外見からの判別がつかなくなっており、山頂部に太陽石なるものが存在するのがその共通点とされている。事実かどうかは疑わしい。

皆神山は、日本のピラミッドの一つ――それどころか、世界最古

のピラミッドとされている山だ。

この山が一般に知られるようになったのは、一九六〇年代半ばから一九七〇年台始めまでに発生した松代群発地震が原因である。この地震は全て皆神山直下で起こっている。また、その後に行われた通産省の地質調査では、皆神山の中心部では、周囲より重力が若干弱いことが判明している。

こうしたことから、この山にまつわる奇妙な噂は多い。

曰く、地下には巨大な空洞があり、この山がドーム型をしているのはそのためである。

曰く、この山はUFOの発着基地である。

曰く、第二次世界大戦時にこの山の地下に大本営が設営されたのは、この山の力を利用して逆境を跳ね除けるためである。

無論、日本のピラミッドや皆神山の噂などというものは、一般的には与太話として受け取られるし、兎月自身もそう感じている。

しかし、同様にもしかしたら——という考えも捨てきれないでいる。それが愚かしさだと知りつつも、である。

そして、其処から人工物らしきものが出たという。気にならないわけがないのだ。少なくとも——

——今日の残りの授業よりは、よほど面白そうだ。

そんなことを考えていると、窓を流れる景色が動きを止めた。どうやら、もう着いてしまったようだ。道中で食べようかと思って買っていたサンドイッチは歩きながらも食べることになりそうだ。

荷物を抱えて、座席を立った。そのまま列車を降りて駅構内を歩き出す。

「近場まで行くには……バスが一番だろうな」

そう呟くと、兎月は端末を取り出して、バスの路線図を表示させる。同時にバス停への最も近い道筋も表示させる。思ったよりも、遥かに遠かったが、歩いていけない距離ではない。

「……行くか」

大きく伸びをして、駅構内から兎月は出た。そのまま市街を歩く。

午後も半ばの平日の町並みには、茫洋とした気だるさが漂っていた。五月の日中、それも平日となれば、そんなものかもしれない。

しかし、その中の一つに兎月は目を奪われた。それは茫洋とした景色の全ての中で、まるで闇夜の月のように鮮烈だった。

それは、漆黒のドレスを着た女だった。

——なんだ、あれは？

美しいことに異論は無いが、何故こんなところにこんな格好でいるのか、全く理解できなかった。

颯爽と裾を翻しながら街を歩く女。彼女は兎月のことなど当然のことのように無視しながら、どこかへ歩き去っていった。

その後姿を目で追いながらも、兎月はバス停に向かった。

：
——：

発掘現場——正確には調査現場へは、存外に簡単に着いた。工事をしていた現場自体がバス停から近かった上に、この先工事中の看板がやたらにあつて、それを辿るだけで現場までつけたのだ。

しかし時間はそれなりにかかり、今はもう午後三時だ。気だるい午後は、もう少しで鮮烈な夕焼けに焼かれるだろう。

調査現場は両脇を、森に囲まれた道路の行き止まりにあつた。斜面の中に作られた道路なので、片側が崖に、もう片方が上り坂になっており、全体的に道が左カーブしている。

行き止まりには数台のワゴン車が止めてあり、数人の男性がその車にまるで砂糖に群がる蟻のように集まっていた。ワゴン車からはケーブルが延びており、そこは行き止まり——崖崩れの跡に繋がっている。そして、そこにそれはあつた。

「……凄いな」

地崩れのためか赤茶けた地肌が露出している山肌の中から、まるで岩を削りだして作ったような、猫の前足があつた。いや、と兎月は考え直す。猫にしては、それは爪の部分が占める割合が大きかつ

た。ならば、これは猫科の肉食獣——例えば、虎や獅子、あるいは剣牙虎のような——なのだろうか？　だとするならば、これが造られた時代が何時の頃なのかは分からないが、その時代には猫科の肉食獣が日本には存在したのだろうか？

その場に立ち尽くし、兎月はその前足をじっと眺めていた。太古から受け継がれてきたものには、圧倒されるものと心を揺らされるものがある。

急に、後ろから声がした。

「兎月君じゃないか。学校はどうしたんだい」

どうやら、見入りすぎていたらしい。後ろに人が近づいていることにも全く気づけなかった。振り返る。

「先生……」

その先にいたのは、千歌の父である高槻　孝祐であった。かけていた眼鏡を外しながら、孝祐は兎月に言う。

「場所に関しては、娘から聞いたんだろがね……しかし、ここまでするかね」

「授業よりこっちのほうが面白そうだったんで」

「興味だけで何でも決めていると、つぶしの効かん人間になるぞ。

私のように」

「それは重畳」

兎月の言に、孝祐は手を頭にやって溜息を付いた。

「君は人の話をだね……まあもう今更仕方がないか。折角来たのだから、見学でもしていくかね」

「当然です。そのために来たんで」

「では、着いて来るといい。確かに、授業よりは面白いものがここにはあるのだから」

兎月に背を向けて、孝祐は歩き出す。

その後を、兎月は追う。随分と昔から、この背中に着いて面白いものを見てきた。今度も期待通りの——いや、期待以上のものを見せてくれるだろう。

「見つかったのは、君も見えていたあれだ」

「あの、岩を削りだした像ですか」

「と、見えるが、違うんだ、あれは」

「どういうことですか？」

歩きながら、兎月は問う。

「正直な話、分からない——というのが正直なところかな。表面上は単なる岩としか見えないが、年代測定用に持ってきた機材で調べてみたところ違うようなんだよ」

「どう違うんですか？」

「それが分からない。はつきり言うなら、あれが砂やら何やらが固まって出来た代物じゃあないってことは分かるのだけれども、それ以上は今ある機材では手に余る。内部構造を調べようにも、何かが表面をコートしていて、内側とそれは全く別のものだってことぐらいしか分からない」

全く困りものだ、と孝祐は両手を挙げた。

しかし、そんな孝祐とは対照的に、兎月は自分の中でふつつと何かが湧き出してきたのを感じていた。それは笑いに還元されて外界に出て行くとするが、兎月は力づくで押さえ込んでいた。

その感情は、喜びなのだろうか？ 兎月には容易に判断が出来なかったし、判断してその感情を脳髓の何処かに整理するつもりもなかった。

——もしかしたら、本当にここには何かがあるのか？

皆神山は本当にピラミッドで、だとするならあれはスフィンクスだとも言っつのか。

「本当に面白い」

呟く声には実感が載っていた。本当に、本当に面白い。学校をサボってきた甲斐があったというものだ。

そんなときだった。

「……ん？」

急に、孝祐が足を止めた。

「どうしたんですか」

それに習って足を止めながら、兎月は問うた。しかし、素直な行動とは裏腹に、精神は微かな苛立ちを覚えた。正直な話が、今すぐにもあの前足に駆け寄って、近くで見て触りたいほどのな。足を止めているのもどうかしい。

しかし、そんな兎月の感情など知る由もない孝祐は直接的に返答した。

「いや、ね。揺れたような気がしたものだから。ここいらの地盤は相当に緩い。なにせ地崩れであんなものが出てくるぐらいだ。地震なんかがあつたら、それはもう不味いことになる」

地震。どうやら自分は焦りすぎているようだ、と兎月は考える。揺れに気づかないなんて、どうにかしている。

「避難——」

と言い掛けて、兎月は止めた。今度は自分も感じたからだ、大地が驚いたかのように一瞬震えるのを。

「今度は君も感じ——」

孝祐の言の途中で、またも揺れた。どうやら、だんだんと間隔が短く、揺れは大きくなってきているようだ。

「避難するでしょう。私は彼らの元まで行く。兎月君はここで待っていてくれ」

そう続ける孝祐を他所に、どんどんと揺れは頻度と大きさを増していた。まるで巨人が貧乏ゆすりをしているかのように、大地が小刻みに揺れる。

孝祐がワゴン車の元に着くころには、大地は既に音を立てて揺れていた。

「車で帰れるのか、これ？」

そう兎月が呟いたときだ。

轟音と共に、地球が反転した。少なくとも、兎月にはそう感ぜられるほどの大揺れが一瞬きた。バランスを崩して、思わず兎月は尻餅をつく。

その一際大きな揺れで、地震はまるで今までのことが嘘だったかのようにピタリと収まった。

「なんだ、収まったじゃねえか」

尻餅までついたのが馬鹿らしい。痛みはあるが、立てないほどではない。さっさと立ち上がるか。そう思ったときだった。

ぴしり、という音が真下から聞こえた。音のしたほうに視線をやると、道路にまるで雲の巣のような亀裂が縦横無尽に走っている。体温が急に下がるのを感じた。

さっさと立ち上がって別の場所に行こう。

立ち上がろうとして、右手を地面に着こうとした。その瞬間、もう一度世界が揺れた。今度は今までのように横ではなく、縦に。まるでシェイカーで掻き混ぜられるかのように。

「え——？」

そして、大地が消失した。先の縦揺れの際に、地が割れていたのだ。右手が着こうとした地面はそこには無かった。視線は宙に上がり、空が何処までも昇っていく。

違う。自分が地の底に向かって、落下しているのだ。

浮遊しているかのような感覚と、何か圧倒的な非現実感に身を苛まれていた。まるで電子と情報で出来た温い泥に身を浮かべているかのような幻想。

心地よさと気持ち悪さがない交ぜになった感覚。

このまま、感覚に身を委ねてしまってもよいだろうか？

否。

そんなことがあるわけが無い。

「死んでたまるか……っ！」

兎月は声を搾り出す。この先にあるのは死——虚無だ。何処までも何も無い、闇ですらない。そんなところに落ちたくは無い。

右手を、天に向けて伸ばす。何かが掴めるはずも無い。分かっているけど伸ばさずには居られない。

「死んで——たまるかっ！」

脳内に、一つの光景がフラッシュバックする。黒い額縁に入れられた写真。泣いている母、血管が浮き出るほどに拳を握り締める父。灰色の印象。線香の匂い。ぶれる視界。泣いている高槻 千歌。何も理解できない自分。額縁の中に居たのは――死んだのは、誰だった？

墜落の衝撃は、思ったよりもずっと軽かった。それでも、兎月が自分の意識を手放すには十分すぎた。

：――：

眼が覚めた。どうやら気絶していたらしい。ここは地の底なのだろうか？ よくもまあ死なずにすんだものだ。そう思いながら、兎月は眼を開けた。

そこに広がっているのは、灰一色の見知らぬ光景だった。

「何だ、ここは？」

シートがあつて、そこに腰掛けている。全体的に空間は手狭で、まるで棺桶が何かのようだ。だとすると、自分はとうに埋葬されているのか？ 馬鹿馬鹿しい。

シートが在るといふ所為なのかもしれないが、ここは戦闘機のコクピットなどに似ているような気もする。但し、そうだというのならここには一つおかしいことがある。余りにも単純すぎるのだ。カラーリングは灰色一色で、外界を見渡すことも出来ないし、計器の一つも着いていない。

シート以外に何か無いだろうか、そう思い、兎月は内部を見渡した。一つ気にかかるものが見つかった。それは、丁度シートの手の位置だった。両手を乗せるであろう部分がカウルのように保護されており、中には暗闇が広がっているのである。この中に手を突っ込むのだろうか。

「他にどうしようもないか」

呟くと、躊躇することもなく兎月はそこに手を突っ込んだ。ぞぶり、という丸で生肉の海に手を入れたかのような嫌な感触が伝わってきた。手を差し入れた先は奇妙に生温く、それもまた、生物の肉を感じさせた。

「なんだこれ……」

——プレイヤーの使用言語を解析完了。

「は？」

何処からか声がしたような気がして。兎月は視線を後ろにやる。無論、其処には誰かの影も形も無かった。気のせいだろうか？

——当機・レオンは該当者を生体認証によるプレイヤーと認識。以降、プレイヤーの指示に従うものとする。AIのステイシスを解除。

気のせいではない。声がある。しかし、これは通常に存在する音としての声ではなく、まるで声を思い返しているときのような、そんな印象だ。

——こんにちは。我が主、七瀬 兎月。私は当機の支援AI、名前は当機と同様にレオンといいます。

急に、声はこちらに語りかけてきた。落ち着いていて抑揚の少ない、成人男性の声だ。

「誰だ、お前は」

——先ほど説明したように、当機の支援AIであり、名前は当機と同様にレオンです。

「それ以前に、ここは何処だ？ それに——当機だと？ どういうことだ！ 説明しろ！」

——認識しました。直接に情報を脳内に転送します。

声——レオンがそう言うと同時に、兎月は理解した。いや、させられた。

理解／知覚／認識。そういったものが、納得という過程を跳躍して直接兎月の脳内に刻み込まれた。ただ、既知の情報として。あまりにも奇妙な感覚に、一瞬気が遠くなつた。洗脳を受けるとは、も

しやこういう感覚なのかもしれない。

「なんだこれは……」

——貴方が両手を触れている部分は演算能力を持った流体金属——
—マテリアル・サイと言つて、一種のナノマシンの塊です。貴方の皮膚表面を透過して、神経と同期して情報流通の簡便化を行います。

「勝手に人の体の中に入りやがったのか」

——健康上での問題はありません。

「そういう問題じゃねえだろうが」

手をナノマシンの沼——マテリアル・サイから抜きたい衝動に駆られながらも、兎月は自分の脳内に叩き込まれた情報を参照する。
叩き込まれた情報はこうだ。

レオンとは、兎月が見ていたあの前足のことで、あれはどうやら全身が残っていたらしい。全体像は猫でも虎でもなく、獅子。兎月が地割れに落ちた際に、レオンも一緒に落ちた。そしてここはその——レオンの中である。

「つまりは、一緒に地面の底に落ちた俺をお前が拾つたのか」

——そうなります。

「一応礼は言つておくが……何のつもりだ。お前が何故俺を助ける必要がある」

兎月は問う。全てが事実だとしても、それが腑に落ちない。レオンが何故地の底で死ぬ筈の自分を助けたのか。感謝する気持ちが無い程、兎月は恩知らずではない。しかし、返答次第では——

——その問いに対する回答として最も適切なものは、自衛です。当機は自己防衛のために、支援AIである私をステイシス解除し、プレイヤーである貴方を受け入れました。

「自衛？ 一体何から身を守る必要があるって言つんだ？」

その問いに、レオンは最も分かりやすく、恐らくは兎月にとつては最悪ともいえる答えを返した。

——当機は、敵機による攻撃を受けています。

「敵——つて、どういうことだ？」

——質問の多い人ですね、貴方は。

「放り込まれた状況が意味不明すぎるんだよ。俺の所為じゃねえ、むしろお前の所為だ」

——では、外部状況をモニターします。それが貴方には最も理解しやすいかと。

レオンが言い終わると同時、兎月の見ている光景が一瞬で変質した。今までの、まるで灰色の棺桶のような光景ではなく、緑溢れる山間の光景に。

何が起こっているのか、と問うよりも早く、脳内にその答えが認識される。人間が認識している現実というものは、目や耳といった感覚器官という名のセンサからの情報を脳内で再構成したものに過ぎない。ならば、先の脳内への情報強制転送と同じ理屈で、レオンの外部センサであるカメラの映像をマテリアル・サイ経由で、目からの情報の代わりとして送ることも可能なのである。

つまり、今兎月の目に映っている光景は、レオンの外部センサの一つであるサブカメラが、地上に出て感知している映像なのだ。

その山間の光景には、異様なものがあつた。

「なんだ、あれは……」

それを容易に表現する言葉を、兎月は知っている。しかし、それは現実に存在するというには余りにも馬鹿げた代物というほか無いものだ。現実に存在するものに対して投げかける言葉ではないものだ。

しかし、そこに存在するものは、それ以外の何物でもなかった。

山を越えるほどではないとはいえ、巨大な全長。

大地を踏みしめる二本、胸らしき部分より突き出た二本。

紛れも無い金属の質感。

それは所謂——巨大ロボットだった。

しかしそれは力強い巨人というよりは、何かぬるりとして人形——特に、糸繰り人形じみた姿をしていた。全体的に突起の少ない、

脱力しているかのようになだらかな外見がそういう印象を与えるのかもしれないし、顔の部分につけられたマスクラがそう見せるのかもしれない。

それが、山に向かって攻撃を仕掛けていた。攻撃に使われているのは、両腕に付けられた巨大な円錐。それが回転することによって螺旋を描き、砂山をスコップで削るかのように山を崩していた。

ロボットは唸りを上げて回転するドリルで、山を掘っていたのだ。「さっきの地震の原因は、あいつってことか」

——肯定します。根拠として、アンノウンとその採掘器が地下を採掘しながら通った跡が、存在しています。

「……何が狙いだってんだ」

あんなものが存在しているわけもわからなければ、それが山を掘っているわけも全く分からない。

——アンノウンの目的は、当機の破壊であると推察されます。

「なんで分かる」

——ステイシス解除されたデータの断片から推察される事実です。

「あてずっぽうってことかよ」

——私はAIです。勘や当て推量とは無縁の存在です。

「そうか」

どうだか、と思いながらも、そんなことは問題ではないことも分かっていた。あのロボットがドリルを使って山を掘っているのは事実なのだ。このままでは何が起こるか分かった物ではない。

だが――

「戦えるのか、レオン？ このライオンは？」

そうでないのなら、全てが御破算だ。

その問いに、レオンは静かに答える。

——当機の戦闘能力ならば、問題はありません。あとは、貴方次第です。

そうこうしている間にも、ドリルによって山肌は削られ、土砂はまるで洪水のように下方を押し流そうとしていた。先生——高槻

孝祐達はもう逃げただろうか。

迷っているのは、時間を無駄にするばかりだ。
ならば。ならば、やることは決まっている。

ふ、と息を一つ吐いた。

「こいつはどうすれば動く？」

——貴方に情報を送り込んだのと逆の方法で、動かせます。つまり、貴方の思考／感覚を機体に同調／フィードバックさせれば良いだけです。

小難しいことは必要無い、ようは念じるということだろうか。
問題は無い。

「細かい設定は頼む」

そう言うと、兎月はロボットを睨んだ。何者かは分からないし、目的も分からないが、放っておくわけにはいかない。

今、あいつをどうこう出来るのは、きっと自分だけだ。

「あいつを——倒すぞ」

——認識しました。地上に飛び出した後に、マスティコアフォームより戦闘形態であるゴーレムフォームへ変形、後に当機のコントロールを貴方に移します。

「よし、行け！」

——了解。

レオンの言葉と同時に、兎月の全身に、一瞬まるで力士に押し掛かられたかのような加重がかかった。

獅子が地上に向かって跳躍した証だった。

獅子の心・3

「さあ、さあ、いらっしやいな私達の敵。女性を待たせるなど、紳士のすることではありませんよ」

周防 命はコクピットの中で呟く。

命が居るのは、皆神山に襲い掛かっているロボット——モルフィングのコクピットだった。コクピット内部は幾つかの計器と操縦桿、ペダルこそあるものの、現行で使用されている戦闘機——飛行機として操作しているよりもコンピュータとして操作している時間のほうが長いと評される——のアビオニクス類に比べれば相当簡易になっている。代わりに、命の首後面にはケーブルが数本繋がれている。それは彼女の電腦と機体を同期させる為のものであり、これによって操縦自体の簡易化と追従性の向上が成立しているのだ。

操縦桿を倒し、命は機体を操作する。右腕に装着された掘削用巨大ドリルが、まるで腹をすかせた肉食獣のように山肌に襲い掛かり、地を食らい尽くした。

「さあ、さあ、さあ。私が獲物を喰らい尽くしてしまう前に、いらっしやいな、私の敵。私達の敵」

歌うように、命は言う。待つのもまた楽しみであるともいうかのよう。

轟、と地が揺れた。

同時に、地の底へ続く割れ目から、スリングショットに弾かれたかのような勢いで、何かが飛び出てきた。

何かは機械でできた巨大なライオンだった。ライオンの全身は白く、鬣の部分には毛の代わりに太いケーブルが無数に生えている。

ライオンは空中で回転しながら、その体型を変質させていた。表面の装甲がまるで水銀用に流れて、形を変えているのだ。それだけでなく機体を構成するパーツが移動し、ライオンを別の形のものに作り変えているのだ。

着地すると同時にライオンは完全に変形を終わらせていた。その姿は、金属製の巨人というべきものだ。四肢／骨格のバランスが獣のものから人体を模したものに变化し、獅子の顔は右肩に移動、代わりに兜を被った人間に似せた頭部が生えていた。

着地と同時に衝撃が大地を伝播し、砂埃のように土が待った。

「ああ」

思わず命は笑っていた。

「いらっしやい」

：
：
：

——変形完了。

「ゴーレムフォームってのは、人型か」

レオンのコクピット内部で兎月は言う。自機の姿を確認出来ないコクピット内であるが、兎月はレオンの姿を、脳内に直接送り込まれる情報によって正確に把握していた。

レオンの頭頂高はメートル換算で約一メートル。大きいことは確かだが、それでも敵機——あの仮面付きの半分ほどの大きさしかない。

送り込まれる情報は他にも無数。武装管制、高度等の位置情報、通信——戦闘機で言うところのアビオニクスにあたる部分が全て叩き込まれ、頭の片隅で把握され続けているのである。奇妙な感覚に、頭痛がした。

——当機のコントロールをプレイヤーに移譲。後は貴方次第です。
「分かってるよ」

やってやるさ。そう思い、兎月は人型に変形したレオンを立ち上がらせる。兎月の意思に呼応して、レオンはその二脚で立ち上がった。同時に、奇妙な感覚に気づく。自分の手足が本来あるべき場所がないかのような——いや、自分の外においてあるかのような感覚。正確には、機体Ⅱレオンが自分の身体であるかのような感覚。その

癖に、思考の中樞は自分の頭の中にある。そんな奇妙さ。

奇妙ではあるが、それは同時に機体に対する一体感でもあった。

これは自分の思い通りに動く。そう確信できる。

立ち上がったこちらに対して、敵機はその面を向けた。表情のない不気味な仮面だ。

「先手必勝だ！」

兎月は脳内に叩き込まれた情報から、武装に関する情報を引き出す。出てきた情報は二つ。

：気化金属式熱量砲『レオンバスター』。

：マテリアル・サイブレード『獅子双牙』。

レオンバスターは獅子の口から気化したマテリアル・サイを敵に向かって放射する兵器であり、獅子双牙は腰部ウエポンラックに内蔵された、通常時は刀身が存在せず、戦闘時にマテリアル・サイで刀身を形成する長剣だ。

兎月は獅子双牙を武装として選び、レオンに剣を抜かせた。開いた腰部から柄を引き抜き、両手を交差させて構える。噴出孔から流体力のマテリアル・サイが放出され、一瞬で刀身を形成した。

跳躍。

敵機との距離を一気に詰めながら、両の剣を同時に振り下ろす。

それは正に獅子の牙。

しかし、それは敵機に突き立てられることは無かった。

一瞬の交錯。

火花が舞い散り、甲高い音がした。

レオンは土埃を舞い上げ、木を倒して地面を摩り下ろしながら着地する。その時には、獅子双牙は刀身が半ばから挟まれていた。

「何が起こった！」

——敵、腕部ドリルによって獅子双牙が削り取られました。

「何でそんなに脆いんだよ！」

——マテリアル・サイの現行における使用量の関係で、密度をさして上げられません。但し、再度の刀身形成は可能です。

「効くのか疑わしいけどなあ！」

半ば怒声の声音で叫びながら、刀身を再形成。今度は地上を走りながら、敵機に接近する。こちらの方が小さいのだから、内側に潜り込めれば如何にか出来るはずだ。

敵機の足元に踏み入る。

「ッらああああ！」

気合一閃、右の牙で斬り上げる。

敵機はそれに左のドリルで合わせる。一瞬の交錯。

またもや半ばから牙は削り取られる。

「まだまだあッ！」

斬り上げた捻りの勢いで、今度は左の牙を突く。狙うは左膝間接部。当たれば致命傷となり得る。

敵機はその一撃に瞬時的に反応して、右のドリルを突きของ進行ルートに打ち下ろす。左膝を突き刺すはずの一撃はドリルに吸い込まれて破壊される。周囲に流体化した刀身が弾け飛んだ。

「この野郎ッ！」

跳躍／離脱。轟音を上げながら森が形を変える。走行／敵の側面に回り込む。跳躍／再接近／着地／右斬撃／左斬撃。両方ともドリルで防がれる。跳躍／離脱／回避。

敵機を中心に回転しながら、レオンⅡ兎月は無数に剣戟を仕掛ける。一撃一撃に必殺の意思をこめた嵐のような斬撃にも関わらず、それらは全て敵機のドリルに弾かれていた。

「強い」

技量において、恐らく自分は大きく敵に負けている。その上、守勢に回られては中々攻撃が通らない。意表をついての一撃、それしかないだろう。

「なら、上だ！」

地を蹴って直上に跳躍。同時にまた刀身を形成する。ただし今度是一本だけで、もう一本は刀身を流体状に再変化／柄内部に収納させ、腰部ウエポンラックに入れた。

——回避行動が困難となります。危険です。

「つつても、攻撃が通らないんだ、仕方ないだろう！」

それに、策が無いわけでもない。

両手で牙を構えながら、兎月は言う。その間に、レオンは敵機頭上遙かに到達する。

「喰らいやがれ、この野郎！」

脳天目掛けて落下する。兎月周辺の視界が加速する。

牙が振り下ろされるはずの頭上にドリルが交差された。敵が選択したのは、反撃ではなく受けだった。

思ったとおりだ。敵の操縦技術は確かに自分よりも優れている。

しかし、相手は守勢に回っている——と言うより、どうやら本格的にこちらを殺しにかかっているわけではないようだ。理由は分からないが、理由がこちらに必要というわけでもない。

殺しにかかっているのなら、どうしてもしょうは在る。

即座に、兎月は牙を持ち代える。刀剣を脳天に唐竹割りに叩きつけるための順手両持ちから、それを真下に向かって投擲するための逆手片持ちに。

兎月は真上から、敵を見る。狙うのは敵ではなく——

「行け」

投擲。落雷の如く、直下——ドリルへと牙が降る。

真つ直ぐに牙は飛来し、衝突と同時にマテリアル・サイを周囲にぶちまける。その様は、まるで高所からトマトを落としたかのようだ。これなら間違い無く煙幕として機能してくれるだろう。

あとはスピード勝負。

左手を右肩にやる。そこにあるのは獅子の頭部だ。

「得物を変えるぞ」

——了解しました。

獅子の頭部を取り外し、手に持った。と、同時に着地する。

——レオンバスター・アクティブ。

気化金属式熱量砲『レオンバスター』——それは獅子の頭部を模

した手持ち砲である。

レオンが着地したのは、敵機の股下。大股を開きながら、砲口を真上に向けた。狙うのは股下から脳天に抜けるコース。直撃すれば、それで勝負が決まる。

「螺子バラ撒いて死ねえ！」

獅子の口〃レオンバスターの砲口が仄かに発光する。獅子が大口を開け、獲物に狙いを定めている。

——レオンバスター・デイスチャージ。

刹那、敵機が体を僅かに引いた。

閃光。

まるで目の前でフラッシュ・グレネードが炸裂したかのような、爆裂的な光が兎月の目に襲い掛かるが、それも一瞬のこと。現在の兎月の目〃レオンのメインカメラが即座に光量補正を掛け、発射前と同等の光景を映し出す。

そこに現れたのは、まるで夜闇の中のライトのような、光の柱だった。

光の柱は身を引いた敵機の頭——仮面に当たり、それをまるでアイスキャンデーでもあるかのように蕩かしていた。

「外したのか!？」

——敵機の戦闘機動に異常は見られません。

「畜生ッ！」

転がって距離を取る。取りながら再びレオンバスターを構える。構えたはいいが、連射が利かないことは分かっている。それぐらいの情報は、脳内に叩き込まれているのだ。実際、砲身の冷却とマテリアル・サイの本体からの供給で凡二〇秒はかかるだろうと火器管制は脳内で言っている。

二〇秒——どうにか稼げるのか？
冷や汗が体温を奪った。

今までと同じように守勢に回り続けるというのなら、それは容易であろう。しかし、手傷を負わせてしまった今、無傷のころと同じ対応で敵が来ると考えるのは、いささか甘い。

その時――

ぐにやり、と一瞬、敵機を中心に空間がゴムのように歪んだ。反動のような形で元に戻ったときには、敵機の姿は、まるで初めから存在しなかったかのように消失していた。

――空間湾曲を確認。片道の空間跳躍転移システムであると推察されます。

「ワープしたのか」

――そう考えてもらって問題ありません。

「勝った……いや……」

そうではない。あのまま続けていて勝てたかどうかなど、兎月自身が一番分かっている。技量の差、そして向こうにはこちらを倒す気がなかったこと。

しかしそんな想いよりも疲労感のほうが強かった。

温い泥の沼に浸かっているかのように、体全体に纏わりつく重さ。

――ゴーレムフォームを解除。当機のコントロールをプレイヤーから戻します。

レオンの声。同時に、視界が変容する。レオンのメインカメラを通した外部の映像から、肉眼で見た灰色のコクピットに。遅れて、身体感覚が変容した。いや、元に戻ったというべきか。しかし、一つ乗る前と決定的に違う感覚があった。まるでこめかみに深くアイスピックでも刺したかのような、激しい頭痛がそれだった。

「うっ……」

頭痛が引き起こした吐き気に、思わず口を押さえる。

――本来異質な感覚を受け入れた代償です。慣れるまでは、どうしようもありません。

「ふざけるなよ……」

吐き気を堪えながら、どうにか兎月は返した。

：

兎月は生きているのだろうか？

森の中で途方に暮れながら、孝祐はぼんやりと考える。

他の発掘メンバーもほとんど同様の状況だ。

常識的に考えれば、死んでいるのだろう。兎月は地割れに飲み込まれた。

その後、地割れからは自分たちが発掘していたもの——機械仕掛けのライオンだったらしい——が現れ、しかも人型に変形して怪口ポットと戦い始めた所為で搜索も出来なかった。先に現れたほうが突如消失し、その後ライオンが変形したほうも、またライオン型に戻った後に、まるで山並みに溶け込むかのように消えてしまった今から搜索しても、手遅れだろう。

なんという事だ。もしも自分がすぐに彼を帰らせていれば、こんなことにはならなかったというのに。

後悔、絶望、すべて手遅れだ。手遅れだからこそ後悔であり、手遅れであることに絶望する。ただただ何処かに落ちていく思考。

「先生、無事でしたか」

それを背後からかけられた声が遮った。振り向くと、七瀬 兎月が歩きながら近づいてくる姿があった。顔色は青いが、体や衣服には傷一つついていない。

「兎月君！ 君のほうこそ無事だったのか！」

「ええ、落ちた先からここまで戻ってくるのは流石に手間取りましたけど、穴の中を歩いてたら偶然外に出ることが出来ましてね」

言い終わると、兎月は突然口を押さえて前かがみになった。青かった顔色がそれを通り越して蒼白となる。

孝祐は急いで立ち上がり、駆け寄った。

「大丈夫かね！」

「ええ、少しばかり気分が悪くて……」

もしや、頭を打つ等の怪我をしていたのだろうか？　ならば、大
事にかかわる可能性もある。

「何処か打ったりしたのか？　だとしたら、すぐに病院に行かなく
ては」

そう言う孝祐に、兎月は弱々しい笑みで返した。

「大丈夫です。何て言うか、その、乗り物酔いみたいなもんですか
ら。時間さえおけばすぐに治ります」

「本当かね？　無理はしないほうがいい。すぐに病院へ……」

「本当に何でもありませんから。でも体調が悪いことは確かなので、
先に帰らせてもらいますね」

「なら、せめて送らせてもらおう。それぐらいはしないとな」

兎月は口を押さえたまま頷いた。

「んじゃ、お願いします。帰りの切符はあるんで、駅までお願いし
ます」

獅子の心・4

：――：

身を投げ出すようにして、着替えもせずに兎月は自室のベッドに仰向けに倒れこんだ。それが、自宅に着いてから最初にしたことだった。

兎月の部屋は机と本棚、ベッドにクローゼットがある程度の、一般的な部屋だ。本棚は古代文明やオーパーツなどの本が納められ、漫画や教科書はあちらこちらに散らばっている。その所為で、全体的には粗雑な印象を見るものに与えていた。

母からは遅くなったことを咎められたり、さつさと夕食をとれと小言を言われたりしたが、そんなことよりも横になりたくて仕方がなかった。頭痛と吐き気は何かおさまったものの、疲労はまだ抜けておらず、座っているのすらだるくて仕方ないような状態である。ある意味では当然だ。それぐらいのことはしているのだ。

脳内に、先のことを思い浮かべる。突如襲い掛かってきた巨大ロボ。偶然見つけたライオンロボ――レオン。戦闘。存在自体が喧嘩を売っていると評されるほどの目つきの悪さの所為で喧嘩慣れ自体はしているが、これはそんな経験が役立つようなレベルの問題ではないのだ。

右手を天井に向けて翳し、拳を握る。何故か、身体の反応が一瞬遅れているかのような違和感を得る。レオンを降ろされてから、兎月はずっとそれを感じていた。

「身体が自分のじゃねえみたいだ」

――初めてでしたから、仕方がありません。慣れることによって、頭痛や吐き気も起こらなくなります。

「なっ……！」

突然の声に、思わず上体を起こし、周囲を見渡した。が、やはり

この部屋の中には自分以外誰も居ない。にもかかわらず、声がした。いや、これは声というよりも――

――レオンの支援AI・レオンです。貴方の体内に存在するマテリアル・サイを用いて通信を行っています。

この、情報を直接認識しているような感覚は、あのライオン――レオンのものだ。

「勝手に話しかけるな！」

――しかし、私達にはコミュニケーションが必要です。何よりも貴方が現状を確認し、認識するために。戦闘時には答えられなかった質問も多かったことですし。

確かにそうかもしれない。今日のことは余りにも分からないことが多すぎる。敵に関することはわからないらしいが、それ以外にも聞かなければならないことは多い。例えば――

「お前は何者だ」

兎月は問う。

レオンはあからさまなオーバーテクノロジーの塊である。

現行のテクノロジーで人型のロボットを動かすことは可能だ。飛んだり跳ねたりすることも。しかし、それは人間の大きさに限った話である。レオンほどのサイズになってしまえば、恐らく歩かせるので精一杯だろう。

現在通信に使われている、マテリアル・サイも分からない。現在のナノテクノロジーの水準などは問題にならない、正しくオーバーパスブレイクマシンインターフェイスとしか言いようがないレベルの超技術だ。BMIとして見ただけでも、兎月の知る現在の電腦技術――ステイモシーバーが主に福祉用として用いられ、先天性の障害に対する現在ベストの回答とされている――を遥かに超えている。

そんなものが、何故山の中から出てきた？

超古代の遺産か何かなのだろうか？ いや、違う。

兎月の問いに、レオンはこれという感慨もなく答えた。

――その問いに対する回答は不可能です。

「何故だ」

——私の中にあるデータは、全てがステイシス解除されているわけではありません。回答不可能な問いも存在します。

「分からないから答えようがない——ってか？」

——有体に言えば、そうです。

「コンピュータだのナノマシンだの言ってるんだから、お前は現代技術を使ってるはずだよな？」

しかし、そう考えると、皆神山の異常とレオンに因果関係は無かったことになる。皆神山の異常が発見されたのは、随分と昔のことだ

——それは違います。私の使用言語は、貴方の使用している言語と単語を基にして構成されています。故に、固有の名詞や訳しがたいた文に関しては意識に近い形を取って、貴方の脳内から、対象となる事象に似た言葉や文脈で構成しています。誤訳が無いわけでは無いでしょう。

「つーことは、お前がナノマシンと言ったものはナノマシンっぽい何かで、コンピュータって言ったのはコンピュータっぽい何かだったことか？」

——その認識が正確でしょう。

だとするならば、こいつが何なのかは結局分からないということだ。超古代文明の遺産なのか、宇宙人の落し物なのか、或いはそれ以外の何かなのか。

何かしら、手がかりを掴めないだろうか。

「お前は何のために作られた？ それも全く分からないってのか？」

——敵と戦い、それ打ち破るために。

つまるところ、純戦闘用。もう少し突っ込んでみるとする。

「敵って、なんだ？ 今回戦った奴等と別にそんなのがいるのか」

——回答は不可能です。今回遭遇したアンノウンがその可能性も存在しますし、そうでない可能性もあります。或いは、既に消失している可能性も。

少し、呆れた。

「じゃあ、何か？ お前は自分が何なのかも分からずに戦ったのか」
——あれは当機狙っていました。倒さなくてはなりません。それだけは分かっています。

はあ、と溜め息をついた。結局分からないことばかりということなのだろうか。

——貴方には慣れてもらう必要があります。まだ、私達の戦いは始まったばかりなのですから。

「おいこら」

レオンの言葉に兎月は反応する。

——どうかしましたか。

「俺はもうお前に乗るつもりはないぞ」

あの時はそうする他に無かったから、レオンに乗っただけだ。今後、レオンに乗ってどうこうするつもりは無い。

——ですが、当機のプレイヤーは貴方です。

「だからどーしたよ」

無然として、兎月は続ける。

「んなことは俺には何の関係もねえだろうが。俺はもうお前には乗らねえ」

——その所為で、誰かが死ぬとしてもですか。

「てめえッ！」

瞬間的に頭に血が上り、兎月は思わずベッドを蹴飛ばすように立ち上がった。まるで逆鱗を撫でられたかのごとく、自分でも不思議なほど軽く、感情が沸点に達していた。自分は何にここまで怒っている？

——事実です。先刻のアンノウンが現れた場合、この国の自衛軍が有する戦力による対抗は不可能です。

「お前だつて言うほど強くはねーだろーが」

心中の熱いものを持て余しながら、兎月は言う。沸点まで上がった熱は、急には下がらない。

事実上、前回の戦闘は負けだ。もう一度あの機体とあたった場合、

どうなるかは想像に難くない。

——それは誤解です。当機は前回の戦闘において、その戦闘能力の全てを使用してはいません。

「負け惜しみか？ 他に装備なんかあっただろう」

——私は敵機の装備を工作用のものであると判断しました。故に、当機最強の戦闘形態——コロツサス・フォームを使用していません。
「コロツサス・フォーム……」

——次は、勝ちます。

は、と兎月は嘲笑う。

「どうだかな」

やはり負け惜しみのような気がする。語り口など印象からは理知的に見えるが、存外にこいつの本質は子供っぽいところがあるのかもしれない。

兎月の感慨を裏付けるかのように、レオンは反論する。論調は時を刻む針のように淡々としたものだ。

——反論させていただきます。コロツサス・フォームの戦闘能力はゴーレム・フォームと比較にならない程の……

と、レオンの言葉の途中で、兎月の端末がポケットの中で鳴った。
「あとにしる」

取り出して相手を確認する。相手は千歌だった。何の用だろうと思いつきながら着信を受けた。

「おう、どうした」

「どうしたじゃないってのよこの馬鹿ッ！」

思わず端末を耳から放して、それでもまだ鼓膜の奥底に突き刺さってくるような怒声が聞こえた。

「行くなって言ったでしょ！ しかも行った先は何か大変なことになってるじゃない！ 配信されたニュースで見たけど、何あれ！ 父さんに繋いだら、あんたも何かなおかしなことになってるみたいだし！」

言葉を弾丸とする機関銃で、端末越しに兎月は途切れることのない

い掃射を浴びせられる。とても耐え切れない。思わず身をすくめながらも、兎月は千歌に話しかける。

「少し落ち着け！ 俺は何ともねえよ。先生も大丈夫だ」

「……本当？」

千歌の返答は、僅かな間を空けていた。疑いという名の間だ、と兎月は思う。仕方ないことだろう。

「本当だ。嘘はつかない、約束する」

これは本当だろうか。確かに自分は怪我をしたりしたわけではない、しかし何もなかったわけでもない。ちくりと胸に針が刺さった。だが、本当のことを言っただろう？ 千歌は信じないだろうし、余計な心配をさせるばかりだ。

「ん、信じる。約束は守るからね、あんた」

「ああ……」

声のトーンが僅かに落ちた。

「じゃあ、切るから。明日はちゃんと最後まで居なさいよ」

「ああ……心配させてすまなかった。悪かったよ」

「そう思うならちゃんと私の言うこと聞きなさい。私を心配させたことより、私の言うこと聞かなかったことが悪いの。反省しなさいよ、この馬鹿」

その声を最後に、千歌からの通話は途切れた。

通信の途切れた端末を耳から話して、兎月は呟く。

「そうだな」

恐らく、本当にそうするべきだったのだろう。千歌の言うことは何時だって正しい。

もうさっさと寝てしまおう。そうすれば、きっと少しは身体も良くなっているだろうし、精神も整理ぐらいはつく。そう思い、端末を床に放り投げ、自らの身体をベッドに向けて放り出した。

——話は済みましたね。では、先ほどの続きです。

身体がベッドに沈み込んだ瞬間、レオンは再び口火を切った。千歌と違って淡々としたペースであるが、その途切れる様子の全くな

い言葉の河は、兎月の精神を、上流から下流に流されて丸くなった石のように磨耗させるには十分だった。

——ゴーレム・フォームでは可変機構との兼ね合いから搭載を見送られたサブウェポンもコロツサス・フォームでは充実しており、密着距離での打撃戦から超超遠距離での砲撃戦にまで対応した正に万能の……

「勘弁してくれ……」

悲鳴すら、蚊が鳴くようなものだった。

獅子の心・5

：
—
：

目を見張るような夕焼けだった。

蕩けて焼け落ちそうな太陽は、その残り香とも言える赤光を教室の中に光線として差し込んでいた。

眼に痛いほどのそれを受けて、兎月は机に突っ伏していた。結局、あ後はレオンの説教と仕様説明を足して二で割ったような演説を夜通し聴かされる羽目となった。つまりはまともに睡眠など出来ていない。千歌からの通話さえなければ、学校をサボりたいくらいだった。瞼は両端が生き別れの恋人でもあるかのように引っ付きたがっているし、頭脳はストライキを起こしている。しかし、兎月の疲れの原因はそれだけではなかった。

——本当に、それでいいのか？

自分に問いかける声が聞こえるような気がする。その声音は、兎月自身のものだ。

——自分には関係のない話だと。そう割り切って。見ない振りをしているのか？

五月蠅しい。あの時はそうする他に無かったただけだ。誰が好き好んで鉄火場に足など踏み入れるものか。自分はただの高校生だ、それ以上でもそれ以下でもない。断じて。

——そうして、また誰かが死ぬんだな。お前の所為で。お前にはそれを止めることが出来るというのに。

糞。

イライラする。まるで神経が落雷を受けた竹のように割れている。足が自分の意思とは無関係に揺すれていた。

だからどうした。俺には関係のない話だ。そうだ、自分にはなん

の関係もない話だ。だから気にする必要はない。コンビニで買い物した後レシートを捨てるように、なんということはないこととして忘れてしまえばいい。ただそれだけだ。

それだけの話なのに、何故。

何故——自分はこうも苛立っているのだろうか。

感情は理性と同じ場所に在るが、仲良くしているわけではない。だから、理で想いを完全に説明することは出来ない。そんなことは分かりきっているが、説明のつかない苛立ちは結局のところ自分をよけいささくれ立たせる。

「よう！ サボりの次は居眠りか、大将！」

「ただでさえ凶暴な面相が三割り増しで危なくなっているな。指名手配犯も裸足で逃げ出すだろう」

そんな兎月に声がかかった。一人目はメロンパンを齧りながら陽気に兎月の肩を叩き、もう一人は眼鏡の位置を中指で直しながら無感情にその隣に立つ。

「圭一に華介か……俺は疲れてんだよ」心底から疲れ果てている兎月。机に突っ伏したまま答える。

「そう言うなって、ラーメンでも食いに行こうぜ」意にも介さず呵大笑しながら言うメロンパン「福山 圭一。」

「べ、別にあんたのためじゃないんだからね。……」たかとあ「でも言っただけ
しかったか」無表情な上に棒読みでそう言う眼鏡「高遠 華介。」

「ねえよ」

「何時までもそこで伸びてるわけにもいかねーんだから、観念してラーメン屋に行くんだ。なんなら奢ってやってもいいぞ——」と

そう言うのと、圭一は無理に兎月を立たせた。こうなってしまうては、もう机の上にぶっ倒れているわけにも行かない。

「いいよ、お前に借りは作らねえ」

圭一の手を振り払い、自分の足で立つ。視界の片隅に、千歌の姿が入る。こちらを見てため息を吐いていた。色々あって疲れているんだ、そんな目で見るな。

：
――：

書齋。薄暗いその中で、仮面の男「^{コレクター}修正者は一冊の本を開いていた。分厚く、重いその本のタイトルは『金枝篇』。英国の人類学者、J・G・フレイザーが刊行した、呪術／宗教の発生と変遷を膨大な資料をもつて描いた大著である。

その前には、四つの影が跪いている。小柄なものが一つ、長身の物が二つ、そしてもう一つが周防。命のものだ。

雪降る山中の如く張り詰めた静寂を、命の張り上げる声が破る。

「理由を聞かせていただけますか？ 修正者。確かにモルフィングは仮面を吹き飛ばされましたが、敵を叩き潰すに十全な戦闘力を保っていました。私は――勝てました。ええ勝てましたとも」

命はその右手を血管が浮き出るまでに強く握り締めた。

「それはどうだかな」

くつ、と笑いながら揺れる一つの影。声は男性のものだ。

その声に向かって、怒りと面を命は向ける。

「私とモルフィングを侮辱するつもりなのかしら。修正者から頂いたモルフィングを馬鹿にしているのだとしたら、幾ら貴方でも覚悟してもらふ必要がありますわ」

「その辺りで止めておきなさい、周防、エルネスト。私は同志が争うのを快く見守るような趣味は無い」

「申し訳ありません、我等が修正者」

仮面の男が本を閉じ静かに言うつ、命は途端に恐縮した。

「私が君を戻したのは、君が失われるのを防ぐためだ。確かに、あのまま戦えば君は勝てただろう。だが、あのまま戦闘が進む事などは有り得ないのだ。何せ我等の敵は切札を^{キース}温存しているのだからね」

「ですが私は――！」

「落ち着きたまえ、周防」

面を上げ、意地となって反論しようとする命を、修正者はなだめ

すかした。

「我等は我等の敵のことを、無論知ってはいる。しかし、相対したことは無い。ならばこそ、まず大事なのは敵の切札を見ることだ。その為には敵の切札を出させて、更にそれに殺されないだけの準備が必要なのだ」

「やはり私とモルフィングでは不足だというのですか！？ 修正者！」

切々とした訴えを、命は続ける。

「私は貴方のためなら、命すらも捨てる所存だというのに。何故分かってくれないのです。私は、私は——」

「それが困るのだよ。君には生きていてもらわなければならないのだから」

ふう、と修正者は溜息を吐いた。変わって、もう一つの長身の影が口を開く。

「俺が行ってもいい。そいつなら、きっと俺を連れて行ってくれるのだろうしな。俺の望む場所へ」

「いや、君の出番はもう少し先だ、ハチエット。次に出てもらうのは、もう一度周防とモルフィングだ。但し、工作用装備では無く戦闘用装備で、な。それで、我等の敵に切札を出させて欲しい。但し、倒すのが目的ではない——ということだけは忘れないでいてくれたまえ」

そう言われて、命は納得したようだった。今までのヒステリックとも言える行動は鳴りを潜め、子供のような笑顔と熱を浮かべて、修正者の次の言葉を待っている。

「今回の目的は『遺産』の奪取ではない。故に、遺跡に行く必要も無い。重要なのは我等の敵を誘き出すことだ。ならば、君が行くのは我等の敵が出てこずにはいられないような場所。そう、例えば——」

：——：

有限亭。奇妙な名前のこの店は、結ヶ原第一高校のすぐ近くに在るラーメン屋だ。カウンター席とテーブル席が三つあるだけの小さな店だが、人の入りはそれなりにいい。特に放課後などは、結ヶ原第一高校の生徒で一杯になっていることも多い。もともと、今日は幾つかの席が空いているが。

高校生に人気があるのは、単純に高校から近いからというだけの理由ではない。店主が結ヶ原第一高校のOBであり、生徒には特別割引が利くのだ。

そのカウンター席に、兎月、圭一、華介は三人並んでラーメンを啜っていた。三人の前にあるのは、有限亭一番人気の豚骨醤油ラーメン。元から相当に量が多いのだが、圭一はそれを更に大盛りになっている。兎月からすれば、一食に取る量としては健康を害す量に見えるのだが、圭一にとっては間食程度なのだろう。

そうは言っても、兎月も麺を啜るペースは速い。こつてりとしたスープが細面によくからみ、するすると胃の内に吸い込まれていく。スープは熱く、額を汗が伝う。眠気が吹き飛ぶには十分と言えた。

「そろそろ教えるよ、昨日何しにいったんだ？ 高槻が心当たりに当たった途端急に叫んだりするし、気になるぞ」

麺を啜り、噛みながら圭一は問う。

「千歌が？」

「ああ、飯時にいきなり『あのバカー！』って。教室に居た連中全員びくつとなつて——なあ？」

「おいえーす」

圭一に華介は感情の入っていない声音で同意する。

教室で大声上げて、一体どっちが馬鹿なのか。思わず兎月は溜息を吐いた。

「あいつは……ったく」

「心配なんだろうさ。お前、結構無茶する性質だしな」

「される必要の無い心配されても、困るんだよ」

「で、何処に行つてたんだ？」

華介が問う。既にラーメンを食べ終わり、店置きの野球漫画を捲つていた。

「ああ、発掘現場までちよつとな」

「またか、お前も好きだねえ」

「仕方ねえよ。こればかりはな」

自分でも、少しばかり度が過ぎているとは思わないでもない。しかし、口から出た言葉と思いは同じだ。これは仕方がない、どうしようもない領域のものだ。

「人に迷惑かけなきゃいいだろう」と、漫画を捲りながら言う華介。かかつてる、かかつてるから。主に俺に。今回は良かったけどさ、その前なんか誤魔化すの大変だったんだぜ」と、圭一。

「除く圭一」

「ひでえ」

華介の辛辣な言葉に、圭一が唸るように返した。いつも概ねこんな風になる。

「次も頼むわ」

「マジか！ また、やる気か！」

「無いとは言えねえからな」

そんなことを言いながら、兎月がラーメンを食べ終わったときだった。

——緊急事態です。

急に、脳内にレオンの声が響いた。授業中や睡眠中に話しかけてこなかったのは良かったが、人が居るときに話しかけてくることも無いだろうに。

「わりい、ちよつとトイレ」

「おう、行つてこい」

「いてらー」

大のほうしかなないトイレに駆け込んで、戸を閉める。これならさして会話の声がもれる事も無いだろうし、聞こえたとしても端末で

の会話だと思っただけだろう。

「一体何があった？」

——前回戦った敵が、再び現れました。どうやら転移してきたようです。

一瞬、まるで首筋に冷やりとした指が触れたように、身体が反応した。脳裏に、巨大なその姿と仮面、そして獣のように唸るドリルが浮かぶ。いや、今はあれに心をとらわれているわけにはいかない。首を振って、印象を脳から追い払う。

「……場所は何処だ」

——茨城県の海沿いを南下中です。進行ルートの先には、東海村が在ります。

「まさか——」

考えるまでも無い。東海村といえば、あれが在るところだ。

——はい、原子力発電所がある、あの東海村です。

東海村で現在運転している原子力発電所——東海第二発電所は、日本初の一〇〇万kW級軽水炉である。現在は解体された日本初の商用原子力発電所、東海発電所とかつては一体化しており、大きな発電量を誇る。そしてその近くの核燃料加工施設では、かつて日本最悪の原子力事故とよばれた、東海村JCO臨界事故が起こっている。

血の気が引くのが分かった。敵の目的は分からないが、巨大ロボットが原子力発電所で暴れたりしたら、東海村臨界事故とは比べ物にならないことになるだろう。スリーマイル、チェルノブイリ、いや、場所の都合上更に酷いことになるかもしれない。

その場合犠牲者は一万を下らないだろう。

一万はただの数字だ。ただ、その一つ一つは外でラーメンを啜っている圭一や、漫画を捲っているだろう華介と同じ、人間だ。一万は数字だが、分散した一は数字ではない。

一つの光景が浮かぶ。いや、それは光景というにはあまりに朧な印象とでもいうべきものだ。道路に立っていた幼い自分が誰かに突

き飛ばされ、その結果自分は助かって、誰かは死んだ。それだけだ。一体何に由来する印象なのかは分からない。しかし、ぼんやりとした印象にも関わらず、それはかえしの付いた棘のように抜けないものとなっている。

——唯一幸いなことは、恐らく敵の戦略目標が原子力発電所ではないことです。

「どういうことだ」

——人質と同じことです。人質を取るのは、それを盾に何か要求したいことがあるから。人質を殺傷するのが目的ではなく。

成程。身代金か。なら、この場合の身代金はなんだ？

「つーことは、要求があるわけだろう。一体それは何だ？ 誰に要求してやがる？」

——要求の相手は私。目的も恐らくは私です。回りくどい表現だ。しかし、理解に時間を要するほどではない。

要するに、レオンを誘っているのだ。

「誘き出すのが、目的だ。そうお前は判断するわけか」

——そうです。仮に原子力発電所の破壊、及び周囲の汚染が目的なら東海第二発電所に直接転移すれば良いわけですから。

「確かに……そうだな」

人質一万人のタイムマン要求とは、剛毅なことだ。糞つたれが。

——私は誘いに乗ります。貴方はどうしますか？

「俺は——」

言葉に詰まる。どうしたらいい？ 喉の奥に壁が出来たかのように、答えが即座に出てこない。

——先日貴方が言ったことは事実です。貴方に、戦う義務は存在しません。しかし、現状で当機がフルに実力を発揮するためには貴方が必要です。故に、これはただのお願いです。見ず知らずの人達のために、死んでください。

言葉が喉から出てこない。代わりに奇妙な熱と軽い吐き気を覚えるばかりだ。出したい言葉は決まっているような気がするのに。

——決めるのは貴方です。問います——貴方はどうしたいのですか？

その言葉を聞いた瞬間、喉の仕えがするりと消えるのを感じた。

「連れて行け」

そうだ。理屈などどうでもいい。確かに自分には何の関係もない話だ。しかし、自分が行けば、万という人間が火の粉をかぶらずに済む。

ならば行けば良い。

ああ、良い気分だ。風吹く平原に一人立っているかのように、自由であると感じられる。初めからこうしていればよかったのだ。自分には関係ないなどと割り切ったつもりになって、賢しらぶっているよりも、自分のやりたいようにやったほうが良い。例えその結果傷ついたとしても、そっちのほうが性に合っている。

つまりは遺跡やら何やらが好きなのと同じだ。どうしようもなく愚かだが、それも含めて自分であり、そのことを嫌ってはいない。

——協力感謝します。

「お前のためじゃねえよ」

そうだ、自分がやりたいからやる。それ以上でもそれ以下でもない。行為が滅私的に見えても、動機は限りなくエゴイステイックである。構うものか、と兎月は思う。

「で、お前は何処に居るんだ？」

——正確な位置としては、貴方の頭上数メートルの壁越しに。理解しやすく言い換えるならば、このラーメン屋の上です。

「少しは隠れるよ！」

——エーテルコート……機体表面にマテリアル・サイを塗膜し、更にマテリアル・サイにモニタとしての機能を持たせ、光学迷彩として起動させています。誰かに見つかる心配はないでしょう。

「……便利だな、マテリアル・サイ」

半ば、呆れる。B M I、剣の刀身、レオンバスターの弾、果ては装甲表面塗膜ときた。演算能力と運動能力を備えた流体金属、いや、

ナノマシン。便利などという領域ではない。

——特異点炉と並ぶ、当機の要です。

「だろうさ——じゃあ、俺が外に出たら拾え。その足で、敵んところまで行くぞ。可能な限り早くだ」

——了解しました。七瀬 兎月、貴方が当機のプレイヤーであることを誇りに思います。

「兎月でかまわねえ」

——認識しました。行きましょう、兎月。

獅子の心・6

：――：

「おー、長かったな」

「大か」

「勝手に言ってる」

トイレから出てきた兎月は、二人に向かってそう言うテーブルに紙幣を置いた。

「急用が出来た。すまねえが、ラーメン代払つといてくれるか？」

「なんだ、また遺跡でも見に行くのか？ 即効で俺に物頼みやがつて」

「いや」

茶化すように言う圭一に向かって兎月は笑う。浮かべた笑みが苦笑なのか、嘲笑か、兎月には自分で確認できない。だが、気分は晴れやかだった。ならば、浮かんだのは純粹な笑みだと思いたい。

「日本を救ってくる」

「……何行つてんだ、お前」

「終に壊れたか」

「まあ、何はともあれ頼んだ」

呆れ顔の圭一と、何を考えているのか――何も考えていないのかもしれないが――分からない華介に背を向けて、兎月はラーメン屋・有限亭を出た。店から出た瞬間、一陣の突風が吹いた。祝いか、呪いか。

どちらでも構わない。風よ、勝手に吹け。

「来い、レオン」

――認識しました、兎月。

声が聞こえると同時に、兎月の眼前で、轟音と砂埃が巻き起こった。同時に、アスファルトが歪む。その形は、巨大な猫の――否、獅子

のものだ。

それを確認したと思ったときには、兎月の視界は即座に変容していた。今その両目に写っている光景は、あの、棺桶のようなコクピットのものだ。

——収容を完了。

何処からどうやってかは分からないが、レオンは兎月をその内部に入れたらしい。そろそろ、デタラメにも慣れてきた。

操縦桿にあたる、マテリアル・サイの沼に手を入れる。視覚が兎月自らのものから、レオンのものに切り替えられる。そこそこな高さから見る、見慣れた光景。結ヶ原がそこにあつた。

——特異点炉、高速演算開始。最大出力で現場に向かいます。

「よし、跳べ！」

命ずる。レオンのライオン形態——マスティコア・フォームでは、思考による操縦は出来ない。自分の身体と違っているものを動かすだけでも違和感が有るというのに、骨格から違う四足獣と同期させようものなら、その結果は分かりきっている。

跳躍。後ろ足でアスファルトを蹴ると、レオンは宙に舞い上がった。同時に、機体のあちらこちらが開く。開いた先にあるのは、スラスターだ。スラスターはレオンバスターと同様の原理で推力を生み出し、またその推力のみでレオンをミサイルのように飛ばした。

目的地は茨城県だ。

：

海岸線の道路を、モルフィングノ命は歩いていた。二〇メートル級の巨大ロボットが一步足を踏み出すたびに、大地は鳴動しアスファルトがチョコレートでもあるかのように割れる。

急ぐ必要はない。正確には、目的地に到着する必要すらない。ただ、敵が自分たちの目的に気づく程度には優秀であることを願いながら、のろりと行く。

装備は工作用のドリルではなく、戦闘用装備の一つ、アサルト装備を用いている。空戦能力こそ無いものの、両手に装着したプラズマ・セイバーシステムの溶断能力や、背面から展開されるミサイルランチャーの破壊力、腰部や脚部に取り付けられた多方面スラストーによる機動力は、バランスの取れた戦闘力を持っており、命が気に入っている装備の一つとなっている。

バランス、汎用性。それこそが、命がモルフィングを愛し、使っている理由だ。修正者が要する機体は他にも複数あるが、全て何処かが特化したものだ。それこそが強さであることは理解しているが、命には歪さに感じられて仕方がなかった。

モルフィングは、その歪さが無い。ストレート／ノーマル／無個性。しかし、その代わりに、様々な装備を使いこなし、武装やパーツを換装する事が出来る。それ故に、ありとあらゆる戦場で戦うことが出来、最も修正者に貢献することが出来る。

歪で斑な力など要らない。ありとあらゆる場面で、修正者の力となる。それこそが命の望みだ。

同時に、それが唯一修正者に報いる法だとも思っている。

自分に道を示してくれた、修正者に。

感傷に浸っていると、モルフィングのレーダーが飛来してくる何かを捉えたことを、命が脳内にインプラントしたチップに伝える。

衝撃波を撒き散らしながら飛んでくるその方向に向かって、モルフィング／命はその首／新調した仮面を向けた。

しかし、光学センサー「通常の視覚では、捉えられなかった。光学迷彩の類でも展開しているのだろうか。恐らくはそうだろうと判断した命は、自分の視覚野に投影される映像を、外部カメラの光学センサーから、レーダーのものへと変化させる。命の網膜に写る景色／正確には写っていると感じている景色が、色の無いものへと変わる。

変化は色が無くなっただけではない。今までは存在しなかったものが、命の眼には見えていた。

視覚を切り替えた瞬間には豆粒としか見えなかったが、徐々にそれは輪郭を詳細にし、また命から見て大きくなってきている。

近づいているのだ、四足獣の姿をしたものが。

「来ましたわね、私の、私達の敵」

：

——敵機を確認。

「ああ、見えてる」

山を越えた先の海岸沿い道路。道路が山に広がる緑と、砂浜の白を道路の灰がくつきりと分けている。道路は曲がりくねっており、建物は然程ない。もう少し道路を行くか、戻るかすれば、寂れた港街か山奥の村に着くだろう。

視線の先に広がる光景の中、敵は居た。前回に比べると、どうやら装備は重装であるらしく、下腕部には何かのユニットが取り付けられており、腰や背中にも装備が増えている。

そして仮面だ。

以前の無機質なものに比べれば、右半分に青いファイヤーパターンにも似た紋様が入っており、幾分か自己主張が感じられた。主張は仮面を破壊されたことへの怒りだろうか。

仮面の復讐機——とでも言ったところだろうか。

だが、リベンジが必要なのはこちらと同じことだ、と兎月は思う。今度は完全に叩き潰してやろう。近づいてくる——近づいているのは自分なのだが——敵に敵愾心をぶつけた。

「突撃したまま、ゴーレム・フォームに変形して、特攻をかける」

——認識しました。ゴーレム・フォーム変形と同時に、コントロールをプレイヤーに委譲します。

レオンがいうと同時、マスティコア・フォームのレオンは、光学迷彩を解除。同時にゴーレム・フォームへの変形を瞬間的に行う。ミサイルのような超高速での突撃は継続したままだ。

風を切り裂きながら／或いは風そのものと同一化しながら、ゴレム・フォームとなったレオン／兎月は右拳を振りかぶる。眼の前には、仮面の敵機。

後は、殴りつけるだけ。

「喰・ら・ええッ！」

拳。

思い切り振りかぶったそれを、突撃の勢い諸共に仮面に叩きつける。それはさながら、小規模の隕石と言ってもいいものだ。

衝撃が右拳に伝わり、恐らくはそれ以上の威力を敵に与えたことをも同時に伝える。続けて、轟音。

拳を受けた敵機の仮面には亀裂が入り、機体は突風に薙ぎ払われた傘のごとく吹き飛ばされ、山肌に叩きつけられた。

スラスターの噴射を止め、レオン／兎月は道路上に着地する。着地したときには、敵機は立ち上がっていた。

「さあ、一発くれてやったぜ」

——敵機の損傷軽微です。

「だろうが、気分は良いさ」

言いながら、獅子双牙を取り出す。長剣二刀の逆手持ちだ。構えたときには、敵機は既に立ち上がっていた。敵機も同様に、構えを取っている。下腕部のユニットの一部、丁度手首下の部分が、球状の放電現象を起こしていた。

「あの武器が何か、分かるか？」

——現象からは、プラズマ化を用いた溶断兵器——恐らくは、プラズマ・セイバーであると推測されます。

「どれぐらいまで届くか、分かるか？」

——システムの簡易さから推測するに、大凡長刀程度の間合いでしょう。射撃能力は、あの装備に限って言えば無いと言っていいでしょう。

「くらったら、どうなる？」

——ゴーレム・フォームのマテリアル・サイ装甲密度では、ひとたまりも在りません。触れるより早く、無効化されるでしょう。

「話にならねえな」

舌を打つ。そうになると、獅子双牙を取り出したのは失敗だった。

そのような武器を相手にとって近距離戦など挑もうものならば、簡単に消し炭にされるだろう。向こうも恐らくは射撃武器を用意しているだろうが、獅子双牙でプラズマ・セイバーの相手をするよりはマシだろうと兎月には思える。

構えたばかりの獅子双牙を収納。レオンバスターに手をかけたところで、レオンが声をかけた。

——それよりもいい提案があります。

「何だ」

——コロツサス・フォームの使用を提案します。

コロツサス・フォーム。聞き覚えが在る。確か、昨日レオンが言っていたこの機体の真の戦闘形態とも言つべき形態のことだ。具体的なスペックの事も言っていたような気がするが、睡魔に敗北した兎月は覚えていない。

「それなら、勝てるつつーのか」

——より確実に。

まだ数日の付き合いであるが、兎月はこのAI——レオンのことを少しずつ理解してきていた。堅物で、妙に子供っぽいところがあり、正確。間違いは言わない。ならば、そうなのだろう。コロツサス・フォームならば、勝てる。

兎月は言う。

「なら、躊躇う必要はねえな。コロツサス・フォーム、使うぞ」

——認識しました。

レオンがそう言うと同時に、兎月の脳内に一つの単語が突然投影された。

プロジェクト
メビウス計画始動。

音でも無く、文字でも無く、ただ印象として投影されたその単語が何を示しているのか、少なくとも兎月にはまったく心当たりが無かった。

コロツサス・フォームと何か関係がある言葉なのだろうか？

——危機の増大、確認。プレイヤーによる発動、承認。周辺状況、問題無し。特異点炉、ドライブ。

兎月の脳内に投影された単語のことなど見えていないかのごとく——或いは、実際に見えていないのか——レオンはメッセージを読み始める。流暢に流れるその調子は、まるで清流のようでもある

そして、最後の単語が読み上げられた。

——レオンハート
アクティブ獅子心・起動。

獅子の心・7

：
—
：

「何が起こっていると言うの！」

命は叫ぶ。

先までは、敵も双剣を構えて、こちらと相対していた。こちらのプラズマ・セイバーに対して敵も剣で来るというのならば、後の先を取ってやろうとプラズマ・セイバーを待機状態にして待ち構えることとする。しかし、敵はそれに反して即座に長剣を収納しなおした。

何を考えているのかと思った瞬間だった。それが起こったのは。敵機を中心として、半径数十メートルほどが球状の闇に覆われたのだ。

それが何なのか、命には理解できなかった。光学センサーで見える限りでは、その部分だけ夜の帳が落ちたかのように、暗くて何も見えない。レーザーで見ると、電波を吸収でもされているのか、そこには何も存在しないかのように見える。しかし、一番奇妙な見え方をするのは、空間センサーで見た場合だった。空間センサーで見ると、まるで其処だけが抜け落ちたかのように見えるのだ。まるで、其処に空間自体が存在しないかのように。

冷や汗が一筋流れているのを、命は自覚した。

怯むな。口の端を噛む／皮膚が千切れ、血が流れる／錆の味が口内に広がる。痛みは、現実感と危機感を自分に与えてくれる。

自分が何者かを思い出せ。

「私は周防 命。修正者が懐刀、四魔剣の一番手」
命は言う。

敵が誰であろうと、負けはしない。そうだ、そうだとも。

ならば一番手は一番手らしく、先手を打って潰してくれよう。

脳内に埋め込まれたチップに、指示を出す。指示を受け、背面に付けられた、二つのユニットの内の一つが口をあけた。ユニットはミサイル・ハイクと修正者内部で呼ばれているもので、七つの六角柱を組み合わせた——即ち、名前通りに蜂の巣を模した形の——ミサイルポッドである。

球状の闇を狙い、命はミサイルを発射する。七つのミサイルが轟音／噴煙とともに垂直に撃ち上げられ、高空から猛禽のごとく襲い掛かる。

数秒と経たないうちに、ミサイルは全弾球状の闇に到達した。

しかし、超高速で目標に命中して爆発を撒き散らすはずのそれは、何ということも起こさなかった。

闇に到達した瞬間、まるで暖簾をくぐるかのように、ミサイルはその中に吸い込まれていつてしまったのだ。

「くっ……」

効かない／先手が取れない。

ならば、と命はモルフィングの両手を突き出した。両手に付けられたプラズマ・セイバーシステムには、使い道が——片方は正規のものではないが——二つある。一つは待機状態にしておいて、振り下ろす際に刃を伸ばす、アークセイバー。もう一つは、待機状態のプラズマをそのまま敵に向かって撃ち出す、プラズマバレット。プラズマバレットはこのサイズのユニットで使用するようには出来ていない上に、大気中では威力／射程が大きく落ちてしまうが、それでも現行の自衛軍や米軍が使っているものとは比べ物にならない性能を誇る。

待機状態のプラズマ球が、機械で空気を吹き込まれた風船のように大きく膨れる。

手からレーザーサイトの光が伸びて、闇球を捉えた。レーザー光は、最早当然のことながら闇球に吸い込まれた。

ならば、プラズマはどうか。

無効？／有効？ 解＝撃てば解かる。

故に。

「死ね」

撃った。

何かが弾けるような音と共に、光の球体は撃ち出される。高速で空中を疾駆するそれは、鬼火であり、火の玉の具現である。

そして、プラズマバレットは閻球に着弾／爆裂した。

：――：

レオンのメイン動力炉＝特異点炉は、通常のエンジンとは全く異なった方式でエネルギーを生み出している。特異点炉が行っているのは、燃料を燃やすという行為ではなく、演算である。つまり、特異点炉は一つの目的に特化したコンピュータなのだ。

演算の結果を、特異点炉は世界に向けて出力する。その結果、世界は螺旋^{ねじ}曲がる。演算結果はそこにまるで大質量があるかのような振る舞いを見せる。結果、世界は法則に従って空間を歪曲し／引力を生み出す。それが、レオンを動かす力となる。

ある意味で、それは詐術に過ぎない。しかし、生み出したエネルギーは絶大だ。

また、その機能を使えば、ある程度の三次元空間制御が可能となる。それを利用したのが、コロツサス・フォームへの変形用空間である。

変形用空間は、レオンの周囲に展開される、空間の繋がりが奇異に変更された空間のことだ。其処に入ることはできるが、其処から出てくることは出来ない。そして、そこに取り込まれた質量は、全てがマテリアル・サイへと物質変換されて、コロツサス・フォームへの変形のために使われる。

大地も、空気も、木々も、敵が放ったミサイルも、である。

実際には、変形^{トランスフォーム}というより、変態^{メタモルフォーゼ}だ、と兎月は思う。

昆虫の変態は、一度繭を作り、自分の身体を全て溶かすことから始まる。今の状態は、それに限りなく近い。

腕が背中から生え、口の中から足が生え、頭がはわたの隣にある。兎月には、少なくともそう感じられる。まるで、全身がぐちゃぐちゃのハンバーグに戻されて、それから粘土細工としてまた別の形にされているような感覚。気分が悪いのではない、身体や脳や精神が、まるごと裏返っているかのような奇妙さだ。

絶叫する。しかし声は出ない。名状しがたいどろりとした異物を流し込まれたかのような、擦れた兎月の精神それ自体が絶叫した。

感覚によつて人間は世界を理解できるというのなら、兎月の世界は、今まさに原初の混沌にあった。全てが無秩序に散乱している。

しかし、その混沌も長くは続かなかつた。

無秩序は秩序に。混沌は法に。カオス ロー

ばらばらだった身体感覚が、型に蠟を流し込むかのように整頓されていき、新しく自分の感覚が戻ってくる。今までの――レオンの時とは異なつた感覚が。

全体的に相当大きくなり、本来の身体に着いていないパーツも増えているのが分かる。脚部は腿から足の付け根にかけて、裏面にスラスタが配置。両腕部、両膝、両肩後ろにはどうやら固定武装があるらしい。そこには、荷物をぶら下げているかのような、僅かな違和感があった。ゴーレム・フォームの際には右肩に移動していたライオンの頭は、胸に移動している。

全身は白銀である。ただし、どうやらこれは未完成の、いうならばサーフェイサーを吹いた状態であるらしいことが、兎月には理解できる。

――エーテルコート開始。

完成した機体表面上に、ライオンの口を中心として、徐々にマテリアル・サイによるコーティングがかけられる。レオンの際は、光学迷彩として用いられたそれは、コロツサス・フォームの際には衝撃分散のために用いられる。

同時に、白銀一色だった機体表面に色がつく。全体的に白を基調とした、トリコロールカラーだ。

感覚が正常になると、兎月の精神状態も安定する。勝手にかき混ぜられて、勝手に安定させられたようで、今一つ気に食わないが仕方ない。

同時に、理解する。この機体の力を。全てが、ゴーレム・フォームのときとは違いすぎる。パワーも、スピードも、武装も。何もかも。

勝てる。そう、兎月は確信した。

——レオン・コロツサス・フォーム、レオンハートへの変形を完了了。

「レオンハート……」

——当機のメモリーに残っていた、コロツサス・フォームのコードです。お気に召さないなら変更を指示してください。

「いや——いい」

コロツサス・フォームなどという長い上に言いづらい名前よりは、そちらのほうが遥かに性に合っている。

——認識しました。トランスフィールドを収束、当機・レオンハートは戦闘行動を開始します。

「よし、やれ！」

——認識しました。

胸部に装着されたライオンが、咆哮する。雷音にも似たそれが響き渡ると、一瞬で周囲の闇がライオンの口内に吸い込まれた。

空間を展開する以前の光景が戻ってきた。違うのは、自分の立っていた場所が、クレーター状に大きく抉れて、茶色の地肌を晒していることだ。抉れた部分は、レオンハートのパーツとして使われている。

眼の前には、両手を前方に突き出した仮面の機体が居た。レオンのときは見上げるほどの大きさだった敵機が、今は目線の高さだ。負ける気がしない。

レオンハート／兎月は地を蹴った。同時に、脚部と背中につけられたスラスターが焰を上げる。爆発的な加速がレオンハートを敵機の背後に回らせる。

火器官制を呼び出す。

：気化金属式熱量砲『レオンバスター』。

：マテリアル・サイブレード『獅子双牙』。

：膝部振動粉碎衝角『ノーティラス・ラム』。

：両腕部四連装機関砲『メテオカノン・マイト』。

：両肩部ミサイルラック『アクティブブレード・ミサイル』。

：マテリアル・サイブレード・オーバードライブ『獅子殲刀』。

確かに、随分と武器が増えたようだ。この至近距離なら、選ぶ武器は一つだ。武装選択Ⅱノーティラス・ラム。膝に付けられた衝角ごと、左の膝蹴りを敵にぶつける。

——ノーティラス・ラム、駆動。

膝から発生した振動が、音ならざる音となって周囲のあらゆる物質を振るわせる。葉がすれ、木が揺れ、音ならざる音は本来の形を取り戻す。

「ぶち抜けえッ！」

敵機が振り向くよりも尚早く、衝角が敵機の右腕を貫いた。ぶつかったのは肘の辺りだが、そこから振動が伝播して敵機の右腕全体を粉微塵に変える。

そうなりながらも、敵は振り向いた。同時に、残った左で突きを繰り出してくる。正拳以上に真っ直ぐな、直突きだ。

しかし、ただの拳ではない。拳の下には発光する球体があり、それが突きと同時に伸びた。狙いは真っ直ぐにレオンハートの胸。ライオンの顔だ。

「糞ッ！」

片腕をとられて、尚止まらずにカウンターを仕掛けてくるとは。相も変わらないの戦闘技量、そして糞度胸だ。

技量では勝てない。だが、だからといって戦闘に負けるとは限ら

ない。性能で、圧倒する。それしかない。

膝蹴りの体勢のまま、スラスターを噴射した。

体勢を変えぬままに、レオンハートは空に飛んだ。同時に、敵機のプラズマ・セイバーは空を切る。

——見事です。

「寿命が縮むぜ」

空中でスラスターを噴射／機体が一回転。落下しながら、敵機を再び捉える。武装選択Ⅱメテオカノン・マイト。右腕を突き出し、それを左腕で支える。両腕の袖口からは、各四門の砲口が伸びていた。

「今度はこれだ！」

ロック
ファイア
捕捉／発射。

四門の大砲が、一門ずつ順番に砲弾を吐き出す。各砲の連射速度は大したことはないが、四門を順に撃つことによって、メテオカノン・マイトは相応の弾幕を作り出すことができるのだ。

着弾。爆音と衝撃波が連続して発生。土や木がサイクロンで飛ばされたかのように、上空に巻き上げられる。

その中にレオンハート／兎月は落下／着地する。周囲を見回すが、光学センサーでは敵を見つけられなかった。

「やったか！」

——サーモセンサーに反応。上です。

「なにっ！」

レオンハート／兎月は空を見上げる。日も沈みかけて、血溜りのように赤い空に仮面の戦機が一体。その腰の側面と背面につけられた、翼と排気孔を足して二で割ったような大型ユニットが、焰を上げている。レオンハートの脚部背面と背中につけられたスラスター同質のものなのだろう。

同時に、その背面から幾つかの小型ミサイルが、まるで、孔雀の羽のような軌跡を描いて飛び出した。

「こんなところでミサイルだぁ！ 正気か、あいつ！」

——自己判断により、迎撃します。

レオンが言うと、兎月の意思とは無関係に、両肩背面に吊り下げられたミサイルラックが持ち上がり、そこからミサイルが幾つも発射された。目標は敵が撃ちだしたミサイルだ。

ミサイルをミサイルで迎撃するという発想事態は古くからあるが、それは戦略級の長距離ミサイルに対して行う防御方法であって、こんな近距離で行うものではない。少なくとも、兎月の常識ではそうだった。しかし、レオンは迷うことなくそれを行った。

宙を飛ぶミサイルは、空中のある一点で極接近する。レオンが放ったミサイルは命中しなかった。しかし、ミサイル間距離が離れるよりも早く、それは爆発した。

轟。

爆音／衝撃波／高熱が発生し、それは敵機のミサイルも巻き込んで更に拡大する。爆音は耳をつんざくほどだが、その前に音を捉えるセンサーのほうダウンした。衝撃波は木々を薙ぎ倒し、レオンハートも僅かに後ろに下げられた。高熱は空中に小さな太陽を作り出していた。

ミサイルを全弾迎撃されたためか、敵機は地に降りてきた。当然のことながら、手傷を負ってはいなかった。

駄目だ。これでは圧倒しきれない。ノーティラス・ラムによる不意の一撃のようなことはもう出来ないだろう。武装と機体性能による圧倒。それこそが、勝利へ続く法だ。

ならば、出すしかないだろう。最強にして最大の一撃を。

兎月は問う。

「レオン。レオンハートが持っている最強の武器はなんだ」

——マテリアル・サイブレード・オーバードライブ『獅子殲刀』が、一撃の破壊力ではそれにあたります。

「そうか——使うぞ」

——一撃で仕留めるつもりですか。

「そうじゃなきゃ勝てねえ。あいつは強い」

兎月は笑う。鮫のように。愉快でもあつたし、不安でもあつた。高揚してもいたし、冷や汗をかいてもいた。矛盾している二つの感情が、溶け合うことなく同居している。カジノで、全額一点に張る時など、こんな気分なのかもしれない。

熱／冷。高／低。進／退。快／恐。すべてを飲み込んで、狂。

——了解しました。兎月、プレイヤーである貴方の判断を信じます。

「期待には答えてやるさ」

——では、マテリアル・サイブレード射出。

レオンがそう言うと、両脚部側面に付けられたウェポンラック——レオンのときには腰部側面に付けられていたものだ——が展開、そこから、焼きあがったトーストがトースターから飛び出すようにして、マテリアル・サイブレード『獅子双牙』が出てくる。レオンハートは自動的にそれを空中で掴んだ。

両手に一本ずつ掴んだ、柄だけのそれを、正眼に構えるように正面で合わせる。

——オーバードライブ。

重なった二つの柄が溶け合い、瞬間的に別個／単一の物体となる。それは、さきほどとは意匠の異なる、大きな一つの柄。両の手で構えても、まだ大きく感じるような代物だ。

兎月／レオンハートは、それを大きく振りかぶる。マテリアル・サイによって、この後どうすればいいかは理解していた。

「刀身形成！」

頭上まで持ち上げていた柄を、眼前の物体を一刀両断するかのように振り下ろす。同時に右足で震脚。半身となって、下段に構えた両手に構えられているのは、先までの柄だけの剣ではない。長い——刃渡りにして二五メートルはあるだろう、片刃の長刀だった。

獅子の心・8

：
――
：

モルフィング／命は、敵が新たなる武器を使おうとするのを妨害しなかった。

ゆるり、と構えて命は呟く。

「私の目的はあなたの全てを見ること。ならば、待ちましよう、貴方が勝負札を切るまでは」

まずは全てを見る。修正者より与えられた任は果たす。当然のこととして。

そして、その上で敵を撃墜する。それが最上だ。

だが、それが平坦に出来ることではないことも、命は理解していた。敵はこちらのミサイルを、全て空中で迎撃した。そして、不意を撃たれたとはいえ、片腕を一撃で持っていかれている。敵機の性能は、モルフィングを大きく上回っているようだ。それは認めなくてはならない。

認めた上で、勝つ。粉碎する。

命はプラズマ・セイバーシステムを限界まで――いや、むしろそれを遥かに超えて稼働させる。右腕下部に発生していたプラズマ級が、水風船のように大きく膨れ上がる。それと同時に、紫電の走る回数や、ばちりという破裂音の鳴る回数も増える。プラズマ・セイバーシステムの限界超過駆動は、プラズマの大きさ、威力と引き換えに、安定性を著しく欠いてしまう。しかし、それでいい。

安定性よりも、破壊力。今必要なのは、そちらだ。

幸いにも、敵機が繰り出そうとしている攻撃――恐らくは切り札となるもの――も、近接戦闘用のものらしい。ならば、一合の撃剣で斬って落とすことも可能だ。その程度の技量は持ち合わせている。

代わりに、武器には確実に一合で敵を仕留められる威力が最低限必要になる。故の、限界超過稼動だ。

理想は後の先——カウンターである。敵の攻撃を先に打たせつつ、それが届くよりも早く、一撃。不可能ならば——敵の攻撃をプラズマ・セイバーで焼き斬りながら、そのまま反撃。

負けるつもりはない。

そう思い、命は身を引き締める。

勝負は、刹那のうちに決まる。大事なのは、精神の集中だ。

：——：

マテリアル・サイブレード・オーバードライブ『獅子殲刀』。

獅子双牙と同系統の近接兵器でありながら、その性能は大幅に異なっている。使い勝手、再展開のしやすさを重視した獅子双牙と違い、獅子殲刀が重視したのは、ただ只管に一撃の破壊力である。最早異形と化すまでに高められたマテリアル・サイの密度により、その刀身は異常なまでの重量と硬度を誇るに至っている。硬度はモース硬度で二七、並のオリハルコン合金を超えている。

また、切っ先の鋭さもその破壊力に貢献している。もっとも鋭い部分の薄さは、モノフィラメントとほぼ同じだ。

それにより、獅子殲刀は、異常なまでの質量をノ極端に狭い面積にノレオンハートの膂力で打ち当てるという、単純にして凶悪なる攻撃を打ち込むことを可能とする。その一撃に耐えられるものは物理的に存在しない。

ずしりとした、頼もしい重量感のあるそれを構えて、兎月ノレオンハートは敵を見据える。砂埃の果てに、敵機は居た。隻腕となり、そこに先ほどまでとは比べ物にならない大きさの、プラズマの光を灯しながら。

敵も、同じなのだ。真つ当な手段ではレオンハートに勝てないが故に、カウンターで斬って落とすことを選んだのだろう。

戦闘とは、コミュニケーションなのかもしれない、と兎月は思う。ただ一つの言葉すら交わしていないのに、兎月は敵のことを理解している。敵も同様だろう。振るった剣先が、放った弾丸が、交わした拳が、言葉以上に互いのことを語るのだ。

どちらも、凍りついたように動かなかった。ただ、空気だけが痛いほどに張り詰めていく。

日は徐々に沈んで行き、周囲はどんどん静寂と闇が支配圏を拡大している。

まるで、吹雪が荒れる雪原に、二体の樹氷が立っているようだ。

ひりつく感覚に、兎月は吐き気にも似た、胸の悪寒を覚えた。どちらかが斬りかからなければ、これは永遠に続くのかもしれない。

そして、恐らくは敵機から斬りかかってくることはない。後の先を取るつもりなのなら、まずは敵に打たせる必要があるからだ。

だが——そんなことは関係がない。カウンターしたいのなら、させてやる。そしてそれを真正面から打ち破る。獅子殲刀は、そのための武器だ。

呼吸を一つ。そして、敵を見据える。

「行くぞ」

呟くような静かな言葉とともに、レオンハート／兎月は地を蹴り、同時にスラスターを起動／背後から響く爆裂音／置き去りにされる景色。

同時に、仮面の敵機も腰部のスラスターを起動。

焰をまるで爆発であるかのように噴射させながら、刹那の間に二機は接近する。

まるで、宇宙空間で交錯した流星のように見えたかもしれない。

レオンハートが獅子殲刀を真上に振りかぶる／敵機がプラズマ・セイバーを待機から解き放ち、捻転を加えて右腕を構える。

二機の動きはほぼ同時だ。

全ては一瞬の出来事。であるにも関わらず、兎月にはその一瞬がまるでゴムのように引き伸ばされて感じられた。

自分も、相手も、まるで動画のスローモーション機能で再生されているかのように。ゆるりとした世界／感覚の中で、兎月は敵機目掛けて獅子殲刀を打ち下ろした。

：――：

「――！」

声が出なかった。

迅い。

敵機の打ち込みは、鬼神の如き速度によるものだった。

命の背に、冷たいものが走り、それは一気に全身へと回る。まるで毒のように。

落雷のごとく縦一文字にそれをモルフィングに叩き下ろされる姿を、命は幻視する。いや、させられる。頭から股まで、敵機の振るう化け物染みた長さの長刀で一刀両断される姿を。

命はプラズマ・セイバーを敵の長刀に向けて振った。理によって取った行動ではない。ただ単に、生物的な恐怖が、敵の武器を止めることを望んだ。それは草食動物的な逃走や防御ではない、言うならば肉食動物的な防衛行動だと言えた。

稲妻のごとき敵の一直線な一刀を、モルフィング／命は月輪のごとく弧を描く一刀で迎撃した。

薄暗い中、鮮烈な煌きが瞬間的に燈り、交わる。

全て、刹那のこと。

ざ、という風風ぐ音と共に、敵機の長刀は、プラズマ・セイバー諸共にモルフィングを叩き切った。刀の軌道上に何も存在していないかのように全てを無視して飲み込む、魔の一太刀だった。

幸運にも、斬撃は機体の中心線からずれているので、コクピットに直撃はしなかった。しかし、戦闘の続行は不可能だ。命の脳内に送り込まれるデータの全てが、そう結論付けさせている。

美しい一太刀だ、と命は思う。斬られた側であるにも関わらずそ

う感じさせるような、防御不可能な攻撃だった。そういう一撃には、常として、魔物のような恐ろしさと美しさが同居している。

プラズマ・セイバーは長刀を灼き斬るはずだった。しかし、敵の長刀は恐ろしいほどの密度や耐熱性を持っていたのだらう。あの打ち込みを止める方法は、恐らくは存在しない。神技を超えた、魔技。そんな一太刀。

——私の、負けだ。

「ふふ」

そうと認識したとたんに、命の口から、笑いが漏れた。

恐怖や絶望から狂ったわけではない。この笑みは、愉快が作り出したものだ。

負けたのは残念だ。悔しいといってもいい。だが、それよりも重要なのは、敵に勝負札を切らせたということだ。本来の目的は果たしている。

ならば、総合的に見て、負けてはいない。修正者の望みは果たされた。

だから、笑う。妖艶に。

「口惜しさも名残惜しさも在るうちが華。また会いましょう、私の敵。次は、負けませんから」

言っと、命は転送システムを起動させた。

空間が、まるでひどく度の入ったレンズ越しに見る光景であるかのように、ある種の規則性とそれ以上の不規則性をもって、ぐにやり、と歪んだ。

：——：

敵を両断したという手応えは無かった。

ただ、敵が真二つになっているという事実を見て、それを兎月は理解した。

勝ったのだ。

「やったな。あれなら流石にどうしようもないだろう」

——離れてください。

返ってきた言葉は、兎月に問い返す。敵機は行動不能のはずだ。
「なんだ……？」

——時空間の湾曲を確認。ここには、諸共に飛ばされます。
冷たい汗が一筋、心中を流れる。

「糞ッ！」

吐き捨てると、レオンハート／兎月は地を蹴って後方に大きく跳躍した。巻き込まれてやる義理など、当然のことながら存在しない。前方の空間が仮面の敵機を巻き込んで、ぐにやり、と歪む。歪みは一瞬で解消され、跡には何も残っていなかった。

その重量に地を震わせながら、レオンハート／兎月は着地する。
「面倒なことしやがって」

——転移後には、残骸も残っていません。

「全くもって用意周到なこった。ともかく——」

レオンハート／兎月は、役目を終えた獅子殲刀の刃を分解して、ウェポンラックに収納する。

「勝ったな」

——原子力発電所への攻撃も無く、被害は最小限で済んだと言えるでしょう。貴方の勝利です、兎月。

「いや、違うさ」

思う。自分一人では、そもそもここまで来ようとすらしなかったであろうと。自分をここまで連れてきたのは——

「俺達の勝ちだ。そうだろう？」

レオンのお陰だ。口煩いし気も利かない奴だが、こいつが居なければ、自分は何がしたいのかも分からないまま、燻っていただけだろう。火は点いているのに、燃えることも無く、ただ煙を上げて、焼けていくかのように。

——賞賛である、と認識します。勿体無いことです。

「堅っ 苦しい奴だな、まったく」

顔をしかめる。素直に喜べないのだろうか？ この機械は。

—— 私に関する評価はその辺りにしておいてください。これ以上ここに留まるのは危険です。撤退を進言します。

「それもそうだな」

折角勝ったというのに、自衛軍やらに攻撃されたら、後味が悪い。「じゃあ、帰るとするか」

—— 認識しました。コロツサス・フォームを解除、レオンハートはレオン・マスティコア・フォームに変形し、結ヶ原に帰還します。レオンがそう言うと、兎月の感覚が、視覚や聴覚を残して、自身の身体に戻ってきた。

外では、レオンハートの内、レオンに必要無い部分だけが、液化してどろりと地に溶けた。まるで、ホラー映画のモンスターが腐肉を脱いでいるようだ。

全てが抜け落ち、中からマスティコア・フォームのレオンが現れると、レオンは光学迷彩を再び展開してから、宙に飛んだ。

二階にある自室から出て、兎月は階段を下りる。同時に、端末を操作してニュースプログラムを起動させる。ニュースプログラムは、契約者が設定したジャンルの記事を配信してくれるソフトだ。兎月の場合、一般的なニュースの他に考古学やオカルト絡みの記事を配信するように設定してある。ニュースプログラムには、設定したジャンルの記事があがると同時に配信される。また記事や用語にコメントをつける事が出来、他人の書いたそれを同じ記事を見た人間が見ることが出来る。つまり、速報性と双方向性の両方を持ったメディアなのだ。

幾つかの記事の中から、兎月は昨日の戦闘に関する記事を選んで表示させる。

自分のやったことだ、世間的にはどういう扱いになっているのか、気にならないわけではない。

記事には、戦闘の際の情景が動画として添付されているが、それ以外に特にこれといった内容は書かれてはいなかった。自衛軍の対応の遅さを非難するコメントが付いていたり、ロボットが使ったと思われる装備の推察をミリタリーオタクが書いていたりした程度だ。「誰にも何も分かってないのが現状っつーわけか」

それは兎月も同じことだ。敵の正体も、レオンのことも、何もかも分からない。

端末を仕舞いながら、ダイニングキッチンに入る。少し早めに起きたため、其処には朝食を作る母——七瀬^{ななせ} 美菜^{みな}だけが居た。

美菜は年の割には若く見え、兎月と居ると年の離れた姉弟と間違われる。

足音に気づいたのか、キッチンの中で、首だけで美菜は振り返る。

ウェーブのかかった髪がふわりと巻き上がった。

「あら、早いね。珍しく」

「偶にはな」

言いながら、テーブルに着こうとして兎月はもう一つ分からないことがあるのを思い出した。ここ最近よくフラッシュバックされる、憶えない思い出——自分を助けた少女のことだ。

母なら、知っているだろうか？ 自分の記憶の歯抜けに関して。

「母さん、さ……」

「ん、何よ？」

振り向いた母の顔を見た瞬間、兎月は、急に自分の喉にまるでこわごわした、堅い靄が詰まるのを感じた。

聞いてはいけない。聞いたら戻れない。

何故そう思ったのかは分からない。しかし、それは真実味をもって兎月には感じられた。だから、そこで思いとどまった。

「いや、なんでもねー。今日の朝飯は？」

「目玉焼きにサラダとご飯」

「和食なんだか洋食なんだか」

笑いながら、兎月は席に着いた。この記憶が戻ることはあるのだろうか。

どちらでもいいのかもしれない。

：

また寝ている。

真つ当に学校に来たにも関わらず、一時間目の半ばから、兎月は眠っていた。いびきをかいていないだけでしたが、赤ん坊のように涎をたらしている姿はとも見られたものではない。

「起こしてやりますか」

はぁ、と溜め息を吐いて、千歌は立ち上がった。もう一時間目は終わっている。二時間目が始まる前に起こしてやるとしよう。

眠っている兎月の背後まで行くと、千歌はその首筋に手刀を当てた。

「起きろー」

「が！」

その一撃を受けて、首筋に手を当てながら兎月は上体を起こした。余程良いところに当たったのか涙目になっている。この程度は許容してもらおう。

「てめえ！」

「はい、涎を拭く」

振り向きながらの兎月の怒声を、千歌は額に指を突きつけながら止めた。まったくもって、だらしない。

「お、おう」

「昨日、今日と寝てばかり。……なんかあった？ 具合悪いんなら、帰ったら？」

兎月は、確かに真面目な学生だとは言えない。この間のように、学校をサボることも、よくある事のうちだ。しかし、二日続けて丸々寝ているというのは、流石におかしい。体調を崩したのかもしれない。

その問いに、兎月は慌てて涎を拭いながら答える。

「あー、大丈夫だ。ちよっと色々あって、疲れてただけだ。少し寝足りねえ」

「その色々が何か聞いてるんでしょうが」

「……心配させたか」

声を潜める兎月。外見に似合わず、気の細かい男だ。相も変わらず。そんなことを気にするのだったら、初めから心配させないようにしてほしい。

「するに決まってるでしょう。それくらい分かれ、付き合い長いんだから。——で、何があったの？」

「……わりい」

そう言くと、兎月はそっぽを向いた。顔を、千歌には見せないよ

うにして。

「言えないんだ……私にも」

「ああ……」

そのまま、二人は貝のように黙り込んだ。

余計に、聞かないわけにはいかなかった。もしも何かしら危ないことに首を突っ込んでいるのなら、止めさせなくてはならない。絶対に。

千歌は、拳を強く握り締める。

そのためには、何をしていたのか、聞き出さなくてはならない。叩きつける。拳を、兎月の机に。ひりつくような僅かな痛みが拳に伝わり、同時に机が震えた。板に釘を打ちつけるような音にクラスメイト達が振り向くが、何が起こったのか見ると、直ぐに談笑や予習に戻る。

「どうしても？」

可能な限り、凄んでみせる。それでもあまり迫力はないし、むしろ滑稽なだけだとは、自分でも理解している。だが、仕方がない。

「二時間目、始まるぞ」

こちらに瞳を向けぬまま、兎月は言い放つ。まるで無関心。そう言いたいかのように。ふざけるな。

「危ないことなら、やめて」

「——心配すんな、大丈夫だから」

ならば、何故自分のことを見ない。見られないのではないか？今は聞いても無駄なのだろうか。

「本当なら、いいけど」

言って、千歌は自分の席に戻った。本当に、大丈夫なのだろうか——そんな心配だけは最後まで抜けないまま。

：
：
：

立ち去る千歌を見ないまま、兎月は心中でレオンに話しかける。

今までは実際に口に出していたが、別にそんな必要は無い。

——なあ、レオン。

——なんでしよう、兎月。

——敵は、今回ので終わりじゃあないんだろう？

——恐らくは、そうでしょう。

ならば、続くのだろう。今日のようなことが。千歌を欺き続けるのは、心苦しい。

無言のままて居ると、レオンが問いかけてきた。

——嫌になりましたか？

——一度始めたことだ、最後までお前に付き合っさ。ただ、な。言葉を切る。ざらり、とした違和感のようなものが心中に存在していた。

それにレオンは何も返さず、そのことが少しばかり有難かった。

：
——：

知るものの少ない海域に存在する孤島。

しかし、島と名がついているが、実際は島ではない。其処は自然の陸地によって作られたものではない。鋼鉄の地面によって形作られた、洋上の巨大建造物——ギガフロートなのだ。

名を、戦艦島と言う。

戦艦島では、多くの人間が生活をしている。一つの目的のために。キッチンでは料理が作られており、研究施設では現行の最先端技術の一足先と同時に、全くもって技術レベルの異なるものの解析が行われている。格納庫では、巨大なロボットの整備と、今は大破しているロボットの修理が行われていた。

人種、国籍、年齢、性別——全てがばらばらの彼等は、全員が修正者なのだ。

そんな彼等が、今はそれぞれの作業場に居ながら、全員が手を止めて手近にあるモニターに目を向けていた。滅多にないことである。

モニター上に写し出されているのは、本に囲まれた部屋に居る仮面の男——修正者だった。

椅子に座っていた修正者は、立ち上がると、オペラ歌手のような身振りで、みなに語りかけた。

「やあ、諸君。喜んでいただきたい。我々の戦いが始まったことを」大破した愛機の近くに居ながら、周防 命はそれを見ていた。その瞳が熱く濡れている。

「私がこの戦いを始めたときは、一人だった。しかし、今やこの戦艦島に居る全員が私の同士——修正者だ。なんと、なんと喜ばしいことだろうか」

格納庫で、背部に巨大な翼とも射撃武装ともとれるユニットを装備したロボットの中で、片目に顕微鏡のレンズにも似た機械仕掛けのアイパッチをした若い男——ハチエツト「ホークがそれを見ていた。

「ならば、達せられる。一人で不可能なことでも我等全てが一つの修正者となることで、目的は達せられる」

金色の長髪を腰まで垂らした、眼鏡の男——エルネスト「イエーガーが、食堂のテーブルに着いて、眼前で手を組みながらそれを見ていた。

「世界は間違っている。世界は歪んでいる。故に、正されなくてはならない。我等、修正者の手によって」

個室のベッド上で膝を抱えながら、それを見ている少女が居た。

「さあ、行こう。喇叭を吹き鳴らし、天使を連れて。これが我等の戦いだ」

戦艦島に居る全ての人間が、それぞれの場所で、この演説を見ていた。

「この、歪んだ世界に、終焉を」

演説が終わった瞬間、その全員がまるで瞬間的に沸騰したかのよう

に沸いた。

彼等は修正者。世界を否定する者達。

. Episode the Leon heart — end

獅子の心・9（後書き）

スーパーロボットが好きです。

ゆえに、スーパーロボットものです。悪の組織に、オーバーテクノロジーなスーパーロボットが単機で向かっていきます。今のところは。

また、言うまでもなく、フィクションです。

モース硬度二七とかまで含めて。

設定はトンチキです。特に、SF絡み。特異点炉とか、怒られそう。まあ、私文型なので、許してください。

そんな話なのですが、それでも良ければこれからも兎月とレオンの戦いに、お付き合いをば。

今回は、地図を巡る戦いになる筈です。

遺産地図・1

陽が落ちて久しく、旅客機の窓からは金平糖をばら撒いたかのような夜景が見える。

機内に流れる音楽は無く、旅客機の揺れるくぐもった音がいやに響いていた。

旅客機中程の席に座りながら、坂下さかした 夕陽ゆうひはそんな光景を眺めていた。

男性用のスーツを着て、黒いネクタイを締めた、年若い女性だ。体付きは細身で、髪は短く纏めている。頬杖を付いて、退屈そうに窓の外に視線を投げ出していた。手元にあるのは、ブラックのアイスコーヒーが入った紙コップだ。

「はあ——」

眼を細めながら、溜息を一つ吐く。

本音を言うならば、重要な事物が関わっているとはいえ、不確かな情報で休みを潰さないでよかった。溜め込んだアニメの録画を見ようと思っていたのに。

自分のような、特異な技術者が少ない現状では仕方がないことは理解していても、早々簡単に納得できるものではない。

そう思いながら、自らの技能の一つを発揮した。

夕陽の脳内には、コンピュータチップが埋め込まれている。それは、夕陽の脳と同期することによって、強力なBMIとして、また情報端末として機能する。

それによって、夕陽は旅客機の制御中枢に潜入する。それほど強力なプロテクトがかかっていないこともあり、潜入は容易かった。

内部に深く潜り、監視カメラの映像を持つてくる。それを脳内に直接映像として投影した。カメラの数は三台、その映像全てを同時に、である。

もつとも、決定的な瞬間を捉えることは出来ないだろうことは、夕陽自身も理解している。いくら空中の密室と言える飛行機の中といえど、人の目があるところで『地図』を取引するなどという大胆極まりないことをするわけがない。

なにせ、盗品だ。

それも、価値としては相当に貴重な代物である。下手を打つわけには行かない。

ならば、注意深くなるのは当然のことだ。お互いに。

そう思いながら、アイスコーヒーに口をつける。唇を湿らす程度の量だが、苦味は口内にじわりと広がった。

相手が注意深いなら、こちらはそれ以上に周到に立ち回ればいいだけだ。そうすれば、負けは無い。

獲物は狩人に狩られるのが常。逆は無い、決して。

では、どのようにして取引は行われるのだろうか？ 今日、この機内で取引が行われることは決まっている。それでいて、人目や力メラの無い場所というところ――

――トイレ……とかかな。

人が直接会って、物を交換しなければならないというのであれば、それは難しい。しかし、今回は物を片方から片方に渡せばいいだけだ。例えば、渡す側が荷物を持ってトイレに入り、『地図』を置く。入れ替わりで、受け取る側がトイレに入り、『地図』を回収する。

――我ながら、完璧な牙え。

トイレ以外でそのようなことができる死角は？

無いはずだ、と夕陽は考える。監視カメラの視線は、機内のほぼ全てを貫いている。

さらに、残った僅かな死角には、同乗した二人のサポートスタッフが目を光らせている。

どうしようもない場所は、トイレだけだ。

――完璧。今の私ならガンダムにも勝てる。いや、むしろ私がガンダム。

むふ、と笑って、一人悦に入りながら、トイレの前を重点的に夕陽は見張る。荷物を持ち込んでトイレに入る人間など、そうそうはいない。その次に入る人間も荷物を持ち込んでいるとしたら、尚更だ。

旅客機の静かな振動だけを聴きながら、夕陽は監視を続ける。トイレに入る人間はぼつぼつと居るが、荷物を持ち込む人間は居ない。ただ只管、野に息を潜めて、罊に獲物がかかるのを待つ。

監視を続ける間、夕陽はコーヒーをちびちびと舐めながら、自らの視覚で外を眺めていた。怖いくらいに静かだった。

旅客機が空港を出てから二十分を過ぎた頃だ。トイレに、一人の男が入った。太った中年の男で、スーツをまるで山の上に持っていたポテトチップスのようにばんばんに腫らしながら、右手のハンカチで額の汗を拭っている。その左手には、スーツケースが携えられていた。

—— がかったかもね。

夕陽は、自らの頭脳を電腦の制御に集中させる。本物の視界が、まるでピンホールに吸い込まれていくかのように狭められていく。

男がトイレに入った瞬間から、監視カメラの映像を独自に録画する。同時に、トイレに入った男の顔を、中央のデータベースと照合した。結果が返ってくるまでには一秒の間も必要としない。合致するデータは無し。もっとも、顔を変えている可能性もあれば、今まで顔を見せたことのない人間だというだけなのかもしれない。

トイレにしては短い時間で、男は扉を開けて出てきた。

次にトイレに入る男が、受取人だろう。ならば後は、二人の顔とこれ以降の動きを見ておいて、飛行機が着陸した際に確保すればいいだけだ。抵抗したところで、ただの人間——それも、旅客機との関係で重火器を装備していない——が、夕陽にどれほどの事が出来るというのか。

出来はしない。それこそが、坂下 夕陽の持つ固有性／希少性なのだから。

ご、と旅客機全体が揺れた。

——ん？

乱気流にでも突っ込んだのだろうか？ それにしては、フライトアテンダントからの警告などがなかった。

完全に電腦の制御に意識をやっていた夕陽は、脳の領域の一部を現実の視界に戻す。そしてその視界で窓の外を覗いて——ぎょっとした。

そこにあつたのは、人型に様々なパーツをつけた金属の塊——巨大なロボットだった。

ロボットが、まるで旅客機と併走するようにして、空を飛んでいたのだ。

：——：

巨大ロボットとレオンハートの戦闘から数日。七瀬 兎月はそれなりに平和な日々を過ごしていた。

レオンに付き合うとは言ったものの、相手が具体的な行動を起こさないのでは、何もしようがない。

今日も今日とて、夕食を食べ終わった後に、学校帰りに買い込んできた全十巻ほどの漫画を、ベッドに寝転がって捲っていた。

煎餅を齧りながら、漫画を捲る。

——変なもんだな。

自分は、ロボットに乗るなんていう珍妙なことに首を突っ込んでいる。しかし、いまこのときのように、煎餅を齧りながら漫画を読んだりもするし、明日になればまた学校にも行く。

五巻の半ばまで読み進めたときだ。

——大変です、兎月。

「どうした？ 今、黒魔術師とバベルの塔で戦つてるとこなんだが」——別に兎月が戦っているわけではないでしょう。そんなことよりも、旅客機が空中で襲撃を受けました。襲つたのは、前回とは別

のものと思われませんが、巨大なロボットです。

ち、と舌を鳴らして、兎月は漫画を投げ捨てて立ち上がった。

前回、付き合つと兎月はレオンに言った。口に出した以上、それは果たさなければならぬ。

「敵、か」

——現行、巨大ロボットを運用できる組織・個人が複数存在していると推測するよりは、そちらの方が堅実です。

もつともな話だ。だが、それを言うならば一つでもそんなものが存在しているほうがおかしいとも言える。

自分とレオン——いや、レオンと同じように、遺跡より発掘されたものを使っているのだろうか？

いや、そんなことは今考えても仕方がないことだ。今現在重要なのは、自分達の敵が、旅客機を襲撃しているという事実のみ。理由については見当がつかないが、それも置いておいていい。

「なら、行くぞ。叩き潰してやるうじゃねえか」

言つて、兎月は自分の部屋の窓を開けた。兎月の部屋は、実家の二階にある。

視界には、夜の闇に住宅街の明かりが浮かぶ光景が映る。市街の中心部に目を向ければ、宝石の欠片を無軌道にばら撒いたかのような光景が見えるだろう。

そんな外に向かつて、兎月は飛び出した。

ナイフのような冷たい風が頬を切りつけ、衣類を捲り上げる。地面に追突するより早く、光学迷彩を施した、マスティコア・フォームのレオンが兎月を飲み込んだ。

兎月の目に映るのは、今となつてはレオンのコクピット内部だ。シートに姿勢を固定すると、兎月は手を肘掛の先に存在するマテリアル・サイの沼に突きこんだ。同時に、レオンのカメラが捉えた映像が、自らの目が見ている映像に代わつて見えた。

「コロッサス・フォーム——レオンハートになりながら、目的地まで飛べ」

——了解しました。プレイヤーによる発動、承認。周辺状況、問題無し。特異点炉、ドライブ。レオンハート アクティブ獅子心・起動。

周辺の空間が歪み、変形用空間がレオンを取り囲む球として展開される。

その球とともに、レオンは空中を疾走した。

・
――
・

ロボットの出現によって、機内はパニック状態だった。

騒ぎ立てる者。泣き喚く者。何かに祈る者。顔色を蒼白にして凍りついたように全く動かない物。フライトアテンダントに詰め寄るもの。窓を敲く者。

夕陽においても、それは例外ではなかった。

——なにあれ！？ 本当にガンダム！？

いや、違う。白い全身に、赤いラインが走る、単眼の機体。特徴的なのは、背中につけられた二つの巨大なユニットだ。まるで翼のような盾のようなそれは、背面に幾つかの砲を束ねたものが張り付いている。

全体的なシルエットは人型であるが、両足を揃えて、背の巨大なユニットを大きく広げている姿は、むしろ空を飛ぶエイのようだ。はつきり言って、飛行機のように、揚力で飛んでいるようには見えない。かといって、莫大な推力で無理矢理飛ばしているというわけでもなさそうだった。

すぐさま、夕陽は情報を本部に照会する。が、当然のことながら該当する過去のデータはない。

強いて言うなら一番近いのは、皆神山と海沿いに現れた謎の巨大ロボットだろう。あれもいきなり現れた仮面の機体と、変形機構をつけたライオンの機体。

——目的は……

まさか、とは思う。思うのではあるが、それ以上の確信を持てる。

この旅客機において狙うべきものなど、『地図』以外に有る訳がない。

それを裏付けるかのように、ロボットの胸から二本の細い何かが、旅客機に向かって飛んできた。ワイヤーのような細さに見えるが、それはロボットの巨体との対比でそう見えているだけだ。実際には、相応の太さを持っている。

そのの先には、スパイラルパターンを刻まれた円筒形の、花の蕾のような何かがついている。何かは発射された勢いそのままに旅客機の外装に突き刺さると、内部にその円筒を侵入させた。

そして、円筒はまさに花の蕾のように、開花した。

カメラのしぼりを開くように、外装を大きく広げると、その内部には作業用のアームがあった。

「不味い！」

今、『地図』はトイレの中に置き去りされたままだ。

座席を蹴飛ばすようにして、夕陽はトイレ。『地図』へと向かった。その跳躍は、通常の人間には——少なくとも、彼女のようなスマートな女性の筋肉には——不可能なものであった。

しかし、その跳躍よりも、ロボットが射出した作業用アームが『地図』を奪うほうが早かった。

その様を、夕陽は確認する。通常視覚から、望遠視覚に切り替えて。

作業用アームは『地図』入りのスーツケースを掴むと、突っ込んでくるときの倍の勢いで、蕾の中に引っ込んだ。

突入した時の逆回しで、アームは花の中に入り、花は再び蕾になる。唯一の違いは、内部に『地図』入りのスーツケースを詰め込んだことだ。

蕾は、高速でロボットの胸に帰っていった。旅客機に開いた穴から気圧差で空気が漏れたが、荷物が一つ飛んだことで栓代わりになった。

「——っ！」

歯を噛む。予想外のアクセシントとはいえ、完全に後手に回って、何者とも知れぬ輩に、自分達が奪取すべき物を奪われた。普段から力を抜いていても、夕陽は自らの能力に、それ相応の自覚と誇りを抱いている。

歯が音を立てる。頭が熱くなる。電子制御を受けていても、それ以上に生の部分が自分を支配していることを感じた。

自分の眼球を含む他の全てのカメラとのリンクを切って、夕陽は外部カメラから送られてくる映像のみを見た。

単眼の巨人の姿を。自らの敵の姿を。

——覚えているぞ。

お前は知らなくとも、自分は覚えているぞ。そして、決して忘れない。

いずれ、刻み込んでやる。自分が、無自覚にどんなものに敵対したのかを。自分——坂下 夕陽が、刻んでやる。

夕陽は苛烈な憎悪を込めて、旅客機から去ろうとする敵を睨んでいた。旅客機もまた、逃げ去ろうとしている。憎悪を一方的にぶつけていられるのも、そう長い時間ではないだろう。

ふと、敵がその動きを止めた。そして、振り返る。まるで、背後の何かに気づいたかのように。

何かが来たのか、と夕陽もまた、カメラの視線をそちらに向ける。そして、夕陽は、それを見た。

：
—
：

単眼の巨大ロボット。名を、ブラストダム。

そのコクピットの内部で、パイロットであるハチエット「ホーク」は口の端を釣り上げた。

彼は独眼である。元から単眼の乗機と違い、後天的に失ったものではあるが。そして、そこに今はアイパッチをつけていた。ただの布ではなく、自らの脳内に埋め込んだ、コンピュータチップと連動

する、カメラをつけたものを。カメラは三つ、まるで光学顕微鏡のレンズのように、アイパッチの上に配置されていた。

金髪独眼の男性。年は二十台。身体に贅肉は殆ど無く、鍛えられている。ただし筋肉をつけたというよりは、無駄を殺いだというような――さながら、虎のような身体。

ただし、僅かに全身のバランスが悪い。左腕が、右腕に比べて細かったり、靴のサイズが左右で極々僅かに違ったりする。

かれは、かつて大きな事故にあい、身体の何割かを機械で補っている。

サイボーグ虎。それが、彼、ハチエツト「ホーク」だった。

ハチエツトは、自分の肉眼とアイパッチのカメラに代わって、ブラストダームのカメラからそれを確認した。

ブラストダームと同じほどの大きさをした、巨大ロボット。胸には獅子の頭をつけた、白と青と赤のロボット。

周防 命を倒した、ライオンヘッドだ。

「来た」

ハチエツトとは笑む。いや、牙をむく。

「来た」

命の实力は知っている。間違いなく、強者だ。それも、自分を生かしてくれるほど、とっておきの。

ライオンヘッドは、その命を圧倒している。

そう思うと、背筋が震えた。一体、どれほどの強者なのだろうか。背筋が震えて、くつくつと笑い声が漏れる。怖くて、楽しくて、仕方が無い。『地図』の確保という本来の任務は果たした。と、なれば、遊んでいくぐらいは構わないはずだ。幸いにも、とてもいいお友達が来てくれた。退屈しないで済むはずだ。

「来てくれたな、ライオンヘッド！」

悲鳴のように絶叫した。

ハチエツトは思う。彼は、どれほど自分を生かしてくれるだろうか――と。

：
――：

「なんだあ！ あの機体は！」

―― 詳細は不明、としか説明できません。

レオンハートのコクピット内。兎月はレオンに問い、レオンが答える。

兎月の――レオンハートの視線の先には、一機の巨大ロボットがいた。全身の白に、赤いラインを走らせ、背中に二基一対の巨大な翼にも見えるユニットを装備したロボットが。

「そういうことじゃあねえよ！ なんて、飛行機に襲い掛かったと思ったら、沈めもしないで、どっか行こうとしてんだ！？」

そうとしか、兎月には見えなかった。

飛行機に僅かな間隣接したと思ったら、何をするでもなく去ろうとしている。あの一つ目の機体は、何が目的だというのだろうか？

―― 仮面の機体と同様に、私達への示威行動という可能性もありますが。あるいは、あの旅客機に何かしらのようがあったのかもかもしれません。

それが何か、流石にそこまでは兎月は問わなかった。旅客機にあるかもしれない何か、その正体が分かっていたら、レオンは真っ先に自分に伝えている。そういう奴だ、このAIは。

「まあ、いい。取りあえず殴る。んで、後から調べる」

―― それでよろしいかと。

「よっしゃあ！」

気合を入れる。同時に、更に加速。小難しいことを考えるより、余程いいのだ。自分はうじうじと考えるよりも、目的に向かって疾走しているほうがいい。そういうタイプの馬鹿なのだから。

爆裂する水蒸気の尾を夜の闇に引きながら、レオンハートは右拳を固め、右腕を大きく振りかぶる。まるで、弓を引き絞るかのよう

『一つ目』は、既にこちらに完全に振り向いていて、旅客機はそこから飛んで離れつつある。

——遠慮なく、ぶち込めるつつうわけだ。

思うと同時に、接敵。

『一つ目』が、拳の攻撃範囲内に入る。

「っだらああああ！」

気合と同時に、引き絞られて、溜め込まれていた力を解放した。

腕は弓、拳は矢。放たれた矢〓拳は、レオンハート自身の速さに、殴る速さを加えて『一つ目』の胸部に殺到した。

世界に金属棒を貫通させたかのような、甲高い音が響いた。

単眼の巨大ロボットに対する、ライオンロボットの拳打。旋風とともに放たれたそれは、見事なまでに単眼の巨大ロボットに受け止められていた。

そのさまを、夕陽は旅客機内部から見ていた。旅客機自体がだんだんと二機から遠ざかっているが、望遠である程度カバーする。

拳を放ち／受け止めたまま、二機は一对の彫像であるかのように沈黙していた。

今回も、ライオンロボットは現れた。目的は、やはり現れたロボットを倒すことのようなのだ。

——正義の味方気取り？ それとも……

単なる破壊者、狂戦士。^{ベルセルク}その可能性も否定は出来ない。

どちらにしても、今、あの二機に関わることは出来ない。遠ざかる光景を見ながら、夕陽はそう思う。

神代の戦争の如く、あるいは、自然災害の如く、人には手出しできぬ領域の戦場なのだ。

だが、そんなことは関係がない。

あれは自分の敵だ。落とし前は、つけてみせる。

・
――
：

レオンハートの放った拳は、『一つ目』によって防がれていた。

『一つ目』は、大型の籠手が付けられた両腕を、縦十字に交差することによって、拳を受け止めたのだ。

「こいつ……」

やりやがる。

拳を防いだ頑強さ以上に、超高速の拳に反応したことに、兎月は

脅威を見出す。人間も機械も手強い、強敵である、と。

殴り付けた状態／受け止められた状態のまま、兎月は『一つ目』を睨み付ける。

更に、静止は続く。

凍りついたように、二機は空中で静止する。

——糞ッ。

心中で、毒づく。

兎月は動けない。動かないのではなく、動けない。攻撃、離脱、その他の行動を一つ行えば、反撃を受ける。そして、『一つ目』はそれを待っている。

傍目に見えるのは拮抗しているような状況だろうが、兎月にはこちらがピンで止められた標本の蝶で、『一つ目』がそれを眺める人間のように感じられた。

お前なぞ、楽に潰せる。

単眼が、そう語りかけているようだ。

ふざけるな。

「見下すんじゃ——ねえよッ！」

吐くと、レオンハート／兎月は火器管制を呼び出し、一つの武器を選択した。

：両腕部四連装機関砲『メテオカノン・マイト』。

両腕に取り付けられたそれなら、この拳を撃ちつけた状態で、もっとも隙が少なく攻撃出来る。

即座に発射。

轟音と衝撃が、右腕に伝わる。しかし、それは『一つ目』へのダメージを意味してはいなかった。

兎月の眼前で、『一つ目』は左足を高く上げていた。

『一つ目』は、メテオカノン・マイトが発射される直前、レオンハートの右腕を蹴り上げたのだ。照準はずらされ、直上に向かって砲弾は吐き出された。

同時に、レオンハート／兎月の体勢は仰け反るようにして完全に

崩されている。

兎月の肌が粟立った。

このままでは追撃を受ける。しかし、そうとわかっていてもレオンハートは反応できない。

『一つ目』の両籠手から、光の刃が伸びる。『仮面』が使っていたのと同じ、プラズマ・セイバーだろう。

『仮面』のものが一旦待機状態になって、振り抜く際に刃として光を形成していたのに対して、こちらは初めから刃を常時形成している。出力が上なのだろう。

それが振られる。光の尾を引いて、刃が来る。

体捌きではかわせない。

だが。

「んんなくそおッ！」

脚部背面のスラスター出力を無理やり引き上げる。今までも無理矢理推力で飛ばしていたのだが、そのバランスを、大きく崩す。

結果、サマーソルトのように足を車輪の軌跡として、レオンハートは高速で回転した。

『一つ目』の二刀が空を斬り、天地が逆になったところで推力のバランスを取り、距離を取る。

しかし、敵も早い。レオンハートに追いつがり、更なる一撃を加えんとする。まだ、レオンハート／兎月は背後を見せたままだ。

「畜生ッ」

また、脚部スラスターで避けるか？ いや同じ手が、二度通用する相手ではない。

——ミサイルで迎撃します。

レオンの声。

同時に、本来は前面まで展開するはずの、肩部ミサイルポッドが中途に展開される。背面に、牙を向ける形で。

——発射。

ミサイルが吐き出される。

「今の内だ」

撃ち尽くしたと同時に、方向転換。『一つ目』との相対的な天地とを合わせる。

ミサイルは糸を引きながら『一つ目』に向かっていく。『一つ目は、足を止めていた。そして、ミサイルが刃の間合いに入ると同時に、動く。

胸に付けられていた機関砲が火を噴き、二刀が高速かつ正確に動き、光の刃文を残した。

複数の爆裂音／爆発。煙が上がる。

煙の中に、赤い円光が人魂のように、ぼう、と輝いた。『一つ目の単眼だ。

だんだんと煙は晴れていき、後に残ったのは、無傷の『一つ目』だった。レオンが撃ち出したミサイルは、全弾がミサイルとプラズマ・セイバーによって、迎撃されたのだ。

状況は先より良くはなったものの、敵の技能を思い知らされた形になった。

冷たい汗が、兎月の皮膚を伝う。

『一つ目』が動いた。

一歩分、足を動かして、空中で距離を詰める。

「くっ……」

詰まったはずの距離が、戻った。もう一歩分、『一つ目』が距離を詰める。対応するように、距離がまた戻る。

何故か？ 疑問に思うまでもない。

——俺は——

恐れている。あの、『一つ目』を、恐れている。その恐れが、自らの意思に反して、レオンハートに距離を取らせている。

——俺は——

震える。身体が、意思に反して。

——俺はあッ！

その震えを、無理やり押さえつける。

彼我の距離が、一分分詰まる。

「マテリアルサイ・ブレード・オーバードライブ！」

—— 兎月、それは……

「うるせえ！」

怒鳴りつける。唾液が飛んだ。

—— 了解しました。

腰部のウェポンラックから、二本の柄が飛び出し、レオンハートの両手に握られる。レオンハート／兎月は、両手を合わせて、その柄を一つにする。一つの大きな柄から、マテリアル・サイが伸びて、刀身を形成。刀身自体が、レオンハートの全長ほどもある長刀、マテリアル・サイブレード・オーバードライブ『獅子殲刀』が出来上がった。

『仮面』を倒した、レオンハート最強の武装だ。

それを下段に構えて、レオンハート／兎月は静止した。切り結ぶ。

それさえ出来れば、勝つ目はある。

対して、『一つ目』はゆるりと距離を詰めていた。空中に居るというのに、まるで地上を歩いているかのように、一步一步。

その動きが、止まった。

レオンハートとの距離は、近い。どちらも、一步踏み出すことで相手に切りかけられる。そういう距離だ。

レオンハートは下段に獅子殲刀を構え、『一つ目』はプラズマ・セイバーを展開したままの両腕を下に真っ直ぐ伸ばして、相対した。「来いよ……」

後一步だ。それで、斬りかけられる。

兎月がそう思ったときだ。

『一つ目』が動いた。ただし、機体本体が動いたわけではない。電車の連結が外れるような音と共に、機体背面に付けられた二つのユニットが外れたのだ。

飛ぶ。二つのユニットと、軽装になった『一つ目』自身が。二つ

のユニットはそれぞれ兎月から見て側方に。『一つ目』は前方——つまりレオンハート／兎月の真正面に。

「こんんのおお！」

飛んでいったユニットは気にかかるが、そちらにはもう反応出来ない。レオンハートは両手で獅子殲刀を保持しており、更にミサイルも撃ち尽くしている。『一つ目』を斬って落とそうとしてとった体勢は、同時にレオンハートの対応力も奪っていた。

それらを飲み込んだ上で、勝つ方法の一つ。自分が動けなくなる前に、本体を落とす。それだけだ。

踏み込み、上段に獅子殲刀を振り上げる。

獅子殲刀の方が、『一つ目』のプラズマ・セイバーよりも間合いは広い。懐に入られる前に、真つ二つだ。

今まさに最高の瞬間。

叩きつける動作に入るその一瞬。

電撃が走るような音と、閃光。落雷か？ いや、ありえない。落雷が、真横から一直線に伸びることなど有り得ない。

——被弾しました。

獅子殲刀が、落葉のようにレオンハートの手から滑り落ちた。

右腕と左脚の感覚が無い。

レオンハート／兎月の動きが止まる。ダメージと、それ以上に驚愕と混乱によって。

何が起こった／撃たれた？／撃つたのはあのユニット？／感覚が無い部分は無事なのか？／獅子殲刀を落としてしまつては戦えない／糞／バランスが悪い／機体が傾いて／そんなことより敵は——

——ああ、目の前に。

赤い人魂があつた。『一つ目』の単眼が。

上と下、同時の一閃。追い討ちとして、回し蹴り。

レオンハートの右腕と左脚が斬り落とされ、本体は大きく吹き飛ばされた。

飛ばされたのは、下方。底に広がっているのは、獣の腹の底のよ

うなダークブルーをした海。レオンハートは、『一つ目』によって海に蹴り落とされた。

水蒸気爆裂のような轟音、そして馬鹿げた水柱。

レオンハートは海の底に沈んでいった。

負けた。

塩気にも似た熱が、腹のそこに広がる。今すぐにも、海から飛び出して、奴に飛び掛りたい。が――

――堪えてください、兎月。レオン本体の部分が傷ついた今、修復には時間がかかります。少なくとも、戦闘中の修復は不可能です。今の状態では、勝ち目がありません。

分かっている。そんなことは分かっているのだが――

「畜生！」

手を、マテリアル・サイの中から取り出し、コンソールに叩きつけた。

弱い。弱すぎる。レオンハートがいくら強くとも、これでは絶対に勝てない。自分は、余りにも弱い。

海に沈み、海水がレンズとなって歪む光景の中、兎月は空を見上げる。

プラズマ・セイバーを停止させ、ユニットを再び背中に装備した『一つ目』が空中で静止していた。

その赤い人魂は、レオンハートが沈んだ海面を見ていた。まるで、路上の小石を見ているような、見下す視線で。

圧倒的なまでの、勝者の余裕。

対するこちらは、哀れな敗北者。

対峙していたときの感覚が、急に兎月の身体に蘇った。足を踏み出す相手に、後退で答えるしかなかった、事実とともに。

「畜……生……」

もう一度、拳を叩きつけた。後は、震えることしか出来なかった。

……

海の底に沈んでいくライオンヘッド。その姿を、ハチエットは見
ていた。

片手と片脚が？がれたところで、まだ戦えたはずだ。それを、沈
んでいくことで回避しようとしている。

ブラストダムの水中戦闘能力は、皆無に近い。水圧には耐えら
れるだろうが、武器は全うに機能しないだろう。逃げとしては、ラ
イオンヘッドがとった策は正着に近い。しかし――

「なんともつまらないな」

ハチエットはそう呟く。

戦力を図るという目的を果たしたとはいえ、周防 命はライオン
ヘッドに退けられた。それほどの強者である、ライオンヘッドに、
期待していた。きつと、自分を生かしてくれるだろう、と。

しかし、現実はどうだ。

確かに、機体性能は恐ろしいものがあつた。見たところ、空戦用
に作られているわけでもないだろうに、気体の推力のみで、このブ
ラストダムと渡り合った。それはいい。

しかし、パイロットの技量は、ざるとしか言いようがない。

こちらにはダメージをまともに与えられず、素粒子ビーム砲撃端
末『ファイアズ』には簡単に射撃され、プラズマ・セイバーに斬り
裂かれる。

無様としか言いようがない。素人そのものの戦い。

戦う前にあれほど感じていた恐怖は、戦い始めてから、干潮のよ
うに引いてしまった。生きるための闘争だというのに、ライオンヘ
ッドと戦っている間、ハチエットは死体だった。

「よくも」

ハチエットの手が震える。自らの意思を汲み取り、

「よくもまあ期待を裏切ってくれたものだ！」

吐き捨てる。海面下のライオンヘッドに向かって。怒りがある。
あまりにも不甲斐ない敵への怒りだ。

「次に現れたならば、塵芥の如く扱い、圧倒して蹂躪してやろう。後腐れの無いように。それが最後の手向けだ、この雑魚め」

烈火の如く吐き捨てる。怒りを通り越した憎悪を。敵ではなく、不甲斐ない敵への憎悪を。

『地図』の奪取という、本来の目的は果たした。期待外れの雑魚の所為で気分を害したこともあるし、早々に帰還するとしよう。

ハチエツトはブラストダムに積んである、帰還用の転移装置を起動させた。空間がブラストダムを基点として捻じ曲がり、ブラストダムは空間を越えた。

：
――：
：

――コロツサス・フォームから、マスティコア・フォームに変形を開始します。

レオンは、コクピット内の兎月に向けてそう言った。

同時に、レオンハートとしては必要であるが、レオンとしては不要な部位を機体からパージする。パージされた部位は、マテリアル・サイへと姿を変え、海底へと沈んでいく。そして最終的には、砂とほぼ同一の素材へと変質するのだ。

腕が、脚が、頭が、本体に先んじて沈んでいった。

既に、レオンは水中に沈むのをやめている。この深度まで来れば『一つ目』もレオンのことを探知は出来ないからだ。

スラスターから、勢いよくマテリアル・サイを噴射して、推進力とする。飛翔するのと同じ方法だが、水の抵抗などにより、空中を駆ける際からすれば、速度は格段に落ちる。

水中を移動しながら、レオンは思う。

惨いものだ。

負けたこと以上に、兎月の状態が惨い。

レオンは、七瀬 兎月という人間をそれほど理解しているわけではない。その筈だ。だが、ここまで荒れている兎月は、今までの言

動からすれば想定外といえた。

——敗北したとはいえ、修復に専念すれば当機の損傷は二四時間以内に完全に修復されます。一度やられたツケは、倍にして返せばいいでしょう。

その言葉に、兎月は何も返さない。

——兎月、貴方ならきつと——

「できねえよ」

震える兎月は、ぼつりと言った。

「負けたのは、仕方ねえかもしれないねえ。だが、俺は退いた。退いた拳句やケクソんなんて突っ込んで、檻褸負けだ」

兎月は雨にうたれた犬のように顔を下げたままだ。

「ビビッて退いたんだ。それは仕方なくねえよ」

退かないこと。ある意味では、それこそが兎月の源泉だったのかもしれない。それが折られたが故に、兎月はこうなっている。

「俺じゃあ、勝てない」

——ならば変わればいいだけでしょ。

レオンは言う。至極当然のことを。兎月も本来は知っている筈のことを。それが必要であるがゆえに。

——弱いのであれば、強く。恐れるのであれば、強く。敵に負けぬように、敵に恐れぬように。ただそれだけの話です。

退かない強さと負けない強さを得る。二つの強さは、同質のものでありながら、まったく別のものだ。その二つを同居させる。

レオンは、兎月にはそれが出来るはずだと思った。それほど理解できているわけでもないはずなのに、七瀬 兎月はそういうことが出来る人間だと確信を持てた。

「んなことが簡単に出来れば、苦労はしねえんだよ」

——たとえ容易ではなくとも、必要であるのならばそうしなくてはならないのです。

戦力の強化は必要だ。しかし、レオン自身の戦闘力をあげること、現行では不可能と断言している。レオンが使える武装は限られて

いるし、コロツサス・フォームのようなマテリアル・サイ使用の強化には、プログラム部分をいじる必要がある。ならば、兎月が強くならなければならぬ。当然のこととして。

兎月は言葉を返さない。

それぐらいのことは分かっているのだろつ。

レオンは結ヶ原へとその足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1903e/>

閉じない世界に約束を

2010年10月28日03時10分発行